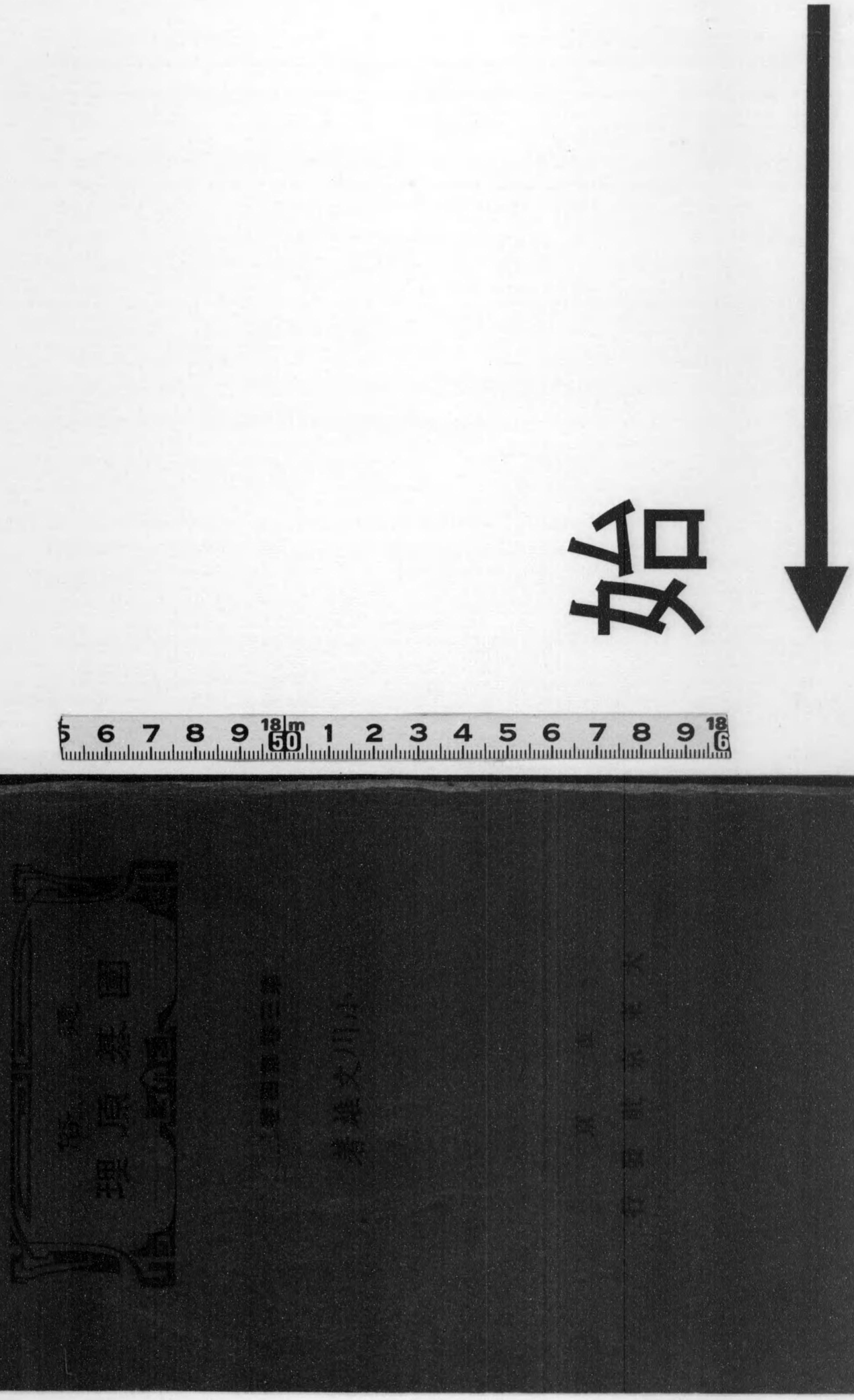

賀
5 6 7 8 9 18 m 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 6
國際郵便
郵便はがき
東京都千代田区
郵便番号一〇〇
東京大学出版会

通俗
圍碁原理

第三卷第四卷

小川文雄著

東京
大東京社發行

327-875

第參卷目次

目外

(1) 低掛り

- 拆
  - (1) 三間
  - (2) 四間 — い — イロハ（ろい）
  - (3) 五間 — ろ — イロ
- 夾
  - (1) 一間夾 — は — イロ
  - (2) 二間夾 — に
  - (3) 三間夾 — ほ
- 掛ケ
  - (1) 小桂馬 — 手抜
  - (2) 大桂馬
  - (3) 大々桂馬（高夾）

(2) 高掛り

- (ア) 斜走 — い（ろい）
- (イ) 附 — い（ろい）
- (ウ) 夾

大正 5. 9. 4 内交

第四卷目次

大目

- 小目
  - ア 内項
  - イ 外項
  - ウ 小桂馬
  - エ 大桂馬
  - オ 夾
- 三ノ三
  - (い) 小桂馬
    - ア 甲乙丙
    - イ 甲乙丙
    - ウ 甲乙丙
  - (ろ) 尖
  - (は) 頂
  - (に) 尖頂

一間高掛り

- (ア) 下項 — い ろ は
- (イ) 上項 — い ろ は（夾項脇）
- (ウ) 夾 — い ろ は（ア イ ウ；A B；甲乙丙）
- (エ) 斜走

二間高掛り

- (1) 上桂馬
- (2) 夾（横項 下項）
- (3) 下桂馬
- (4) 尖
- (5) 手拔

評と註 安藤城南生

畫内著者

通俗圍碁原理 第三卷（續編第二）

小川文雄著

前二卷は碁の公法を説いたのであつた、本編は更らに進んで碁の權道を論究せんとするのである。

第二卷は小目定石の凡べてを盡さなんだ、（目次參照）未だ一間高掛りと二間高掛りを叙べねばならぬ、夫れを第四卷高目の終に加へる事として、本篇は目外より始めんとする。

分類を正則に立てたなら目次の如くにするが當然であらう、さり乍ら叙述の順から云へは、夫れ等を高目の手拔の塲合として其末の部に連らね、讀者の諒解に便にする

小目一間高懸り定石手頃の解し難き記し難く底大桂馬に比べ懸けの比にあらず之を定石の最終として卓に据ゑ尾の句として爲さんす知る者べし著者の意なる用ゆ深きを。

が著者の働ではあるまい乎、

定跡の中で最も複雑なものは目外である、就中彼の大桂馬掛けは初心が記憶するに難しとする所である、斯る難路を容易に進み得る爲めに、著者は分類を立てた、分類を明かにしたなら讀者は勞少くて修得することが早い。

所が小目の高掛りは夫れ程複雑でなくて呑込み難い、手順が紛らはしいからである、坊門中錚々たる内弟子すらも時折打損したことがあつた、手順が面倒で紛らはしい丈けに碁意味が深い、互先定石の結尾に廻はした所以は茲にある。

現代の人は現代の筆と現代の頭に成りて讀む可き書なり目外定石萬卷書は古目外定石築底と目外なる書なり此書の目外の定石は起て基の礎なり明かに碁意を切り碁界の別を細に評し新舊の目外を入れ而して後に定め其根底を引き出し適例を挙げて之を開かるべし

目外

（ろ）

（もくはずし　もくはずれ　又は單にもくはずと訓む）

目外は小目の變である、小目が正道的なれば之は權道的である、已にして目外は權道的である、趣向として用ゐられるのは其本能ではあるまい乎。

凡べて勝負を爭ふ第一の要義は正々堂々奇に出でず危を踏まず、無用の紛擾を避けて簡易に勝を制せんとするに在る、相撲道に於ける横綱の取口を見ても知れる。

盤に向つた時の心得は對手の事を思はず、單に碁を打つと云ふ丈の考であれば可い、敵が強からうが弱からうが、然んな事は念頭に浮べてはならぬ。勝負は一に吾に在る、敵に致されるのは己れが拙ないからだ、夫を以て敵が強いとも云へるが、又一方己れが弱いとも云へる。

三尺の童子も尙且此理を知るのに、「プロベラ」の樣な結び紐を去つて文金に適合な鼈甲を强請む孫娘もありそうな年輩で居乍ら、藥鑵頭に湯氣立てゝ、「親の死目に逢はなんだ程の拙者を、能くも斯程な卑劣な手で嵌め居つた」抔と夢中の譫語を列へる手合がある。

「碁」こそ能い迷惑、此調子では碁でなくも親の死目には逢はれまい、勝負事は尤も能く人格を露骨に告げるものである、殊に初心の內は勝負に囚はれるから一切無我夢中になる、段近くならねば入り來つた人に常態で挨拶がせれぬ。

閑話擱筆斯る族が、若し段違の强敵に出逢へは忽ち萎み、弱い相手と見れば必ず奇道を取り冒險をする。

目外を權道的だとは申したが、斯る場合の冒險用に供せられては其本能とはならぬのである。

黑を持てば先着の効力を保持して居るから、好んで權謀を弄する要がない、小目で打進むが當を得たるものである、乃で白は袖手勝を讓らんよりはと茲に趣考を立てることになる、其時目外や大目が使用されるのである。

然らば目外は趣考の時にのみ使用さるゝや？、と問はゞ否と答へねばならぬ。

目外を使用せねばならぬ場合が黑にも白にも起ることがある。

左右對隅の布石との關係上、小目では工合が悪い場合がある、其時變態に出づるが本筋となる、常即ち變たり、變即ち常たる事になる、碁の興趣とは此處等を云ふのである。

碁に限らず凡べて競技は仕合のみをして居ては上

達するものでない、庭球でも外れた球だからとて打ち返へさずに、一點儲けて喜んで居ては腕が磨けない、夫故仕合の外は受けられる限り受けるが却つて自己の爲めである。

碁論としては、小目を主として布石し、其要生するに及んで始めて目外なり、大目なり、場合に應して之を使用すべしと云はねばならぬ、けれども決戰にあらざる限りは折にふれ之を試みるは、上達を促す介助となるものである。

乃で目外は趣向で用ゆる時と、夫れに限る時とあると知れた、其具體的の御話が本編の全部となるのであるが、目外が小目の變である以上、之を根底として築かれたるものは……

場合定跡

が多い、從つて其可否は場合次第即ち附近の配石の模樣で定むべきものと考ねばならぬ。

古い碁書は皆目外定石の各に就いて是非を云爲して居るが、我が讀者は此意義を體して古評に重きを措いてはならぬ、其局部のみを以て論すれば、或は古評を正しいものとして大謬あるまい、併し場合定石が多いのであるから、視界を廣くして考ねはならぬ事がある局部の是非論のみでは大勢を見るの明を失する。

第一圖

白四は趣考の手である、之に就いて是非の論はない。

白四を小目☒に打つも、目外の四に打つも、此場合何れ優り劣りはない、四と目外に打つは普通は黑の一、三の陣立

から※の邊に啓くを嫌つた手と解釋して差支はあるまい。

黑若し※に來れば、白は濟し顔に⧄に備へる、※は二等席で⧄は一等席なるは隅と邊との別があるからで、瓦と黃金の相違がある、夫れでは堪らぬから黑は先づ邊の※よりせずして⧄に來るは必定である、だから白は※に打つ順を得る。

併し其順を得ればとて、夫れに拆らくや否やは之れ又次の趣考に遷るのである。

第二圖

之は目外でなくばならぬ場合を示す例である。

黑五は盤中唯一の打場所たる明隅に着けねばならぬとは布石の要義が告ぐる所である、然らば此明隅に來るとして

(ア)の小目は、例の一三五に組む布石となるから惡からう筈はないが、三の手で之に打てば兎も角、己に三を一三五の五の位置に下した上は、※に目外に打つを上乘とする。

(イ)は三と向合であるから面白くない(此理由は布石の部にて申す)

尙具體的に何故※が良い手かと云へば目外に對して低掛りと高掛りとの得喪を申せば、其局部丈の計算では無論低掛りが得で、高掛りは損である、(委曲は後にあり)夫故白が(イ)に掛り來るとすれば、黑は徐ろに(エ)に尖んで居る、其時白は(オ)に尖んだ上でなくば(ウ)の邊に廣く拆けない、(理由前卷參照)乃で白(オ)に尖むとせん乎、上下兩隅に相似形が出來る、而して黑が打つ番である、並方の天王山たる星下は黑の占領に歸するではない乎。

それが厭やさに白が始め(オ)に高掛りをするなら、之れも黑の思ふ壺ではあるまい乎。

此布石が一三五の定石より優る所は、白をして早く(ウ)に拆かしめぬにある、一三五は確な布石ではあるが確な丈けに鈍味がある、其短あることは

創案者の秀策も公言して居たとの事である。

第三圖

昔は白一に對し黑は律義に(ア)に大桂馬を打つたものだ、當時は夫れを意氣地ないとして其對隅に二ト目外を打つを働きある着手と考へ出した。

簡明直截直ちに奕機を獨露す

其理由は目外に對し(イ)と低く掛るが最上の打場所とすれば、白が夫れに來るとする、其時(ロ)と打つて拆(ひらき)と夾(はさみ)とを兼ねると云ふ誂へ向の好着を得る便があるからである、白も夫れをさせてはならぬ所から(ハ)と高く掛り來る、之れ又黑の待受くる所である。

第四圖

黑五を何處に打つべき乎。

大目のことは別として小目か目外かを採用する外はない、假りに小目を採るとし、先づ(ロ)に陣取れば、後に白(ニ)に懸り

來るを豫想せねばなるまい、然る時は白四を(ホ)に夾擊する手の効力が薄くなる、(第二卷廿一頁參照)

白が(ヘ)に懸り來る時も、黑の三と白の四が此對峙をして居る時は、矢張(リ)に三間夾する手が氣の利かぬ事になる。

夫故(ロ)の小目は先鞭を着け得る黑の身に取つては嬉しい打場所とは思はれぬ。

然らば向を換へて(ハ)の小目を採用したとすれは如何。

之れ又白に(イ)に懸られるを豫期せずばなるまい、其時白の四は(チ)に小桂馬掛けする向にあり、(イ)の白亦(ハ)の黑を(ヌ)に掛けて壓迫する向にある、左邊に黑が打込んだ時、白は此權能を利用して黑を腦ますに都合良い、從つて碁が廣くなる、其因は始め(ハ)の小目を撰んだに在る。

今黑五の手を(イ)なる目外に擇ぶとすれば、此隅で互角の分

れに組まん爲めには、白は(ハ)と低く懸るが當然であるから白の(ハ)に打つを豫期する、扨て其時は黒が(ヌ)に掛けて敵を壓迫する側に立つて居るから、今度は(ホ)に白を夾擊するに便となる、夫れ故白も浮と(ハ)に低掛りに行けぬ、敵に其不便を生ぜしめた丈け(イ)の目外は小目に優る事になる。

第五圖

黒五の手を明隅に擇ぶべきは碁性の然らしむる所、乃で(ア)又は(イ)の小目に打てば如何。

黒五若し(ア)なれば白は直ちに(右)に懸り來るは必定である、さすれば白四が(右)の味方と相須つて都合良い向になる。

之れでは少し未だ白が利なる理由が判然しまいから、解き方を變へて證明すれば、黒五を(ア)に打てば白四と向合の位置になる向合になつて先手を持つ方が常に有利の地位に立つ説明は、其時假りに白(い)に備へ、黒(ろ)に

對等に備へたとして、扨て竝方から互に以て天王山とする場所なる(は)を占領する順を得るものは、白である、

實戰に於ては其布石に出でず、白(右)に懸り來るも、結果は白四の方向が誂向になつて居る丈け黒に不利となる。

黒五若し(イ)なれば白(左)に懸り來るを思はねばならぬ、星の石に向がない(第二卷十二頁)と申したが、逆向になつて居ないから矢張前の場合と同しく白に好い調子を與へて黒が打難いことになる、(ア)も(イ)も面白くない、即ち小目は此場合香ばしくないとの斷案が下る、それで此處にも目外が調法がられる、而して其目外は(右)か(左)か其何れが可なる乎が又問題になる。

現時流行は(左)で、白(イ)に來れは三間拆をするが普通であるが、白四が此向にある時は(右)を擇ぶも差支ない。

此説明は布石の部で致そう。

第六圖

白二が此向の大目にあり、白四の小目又此向にある時、黑五の目外は當を得たるもので、其理由は之れ又布石の部に讓り、今は岐路を辿らぬのであるが、讀者自ら啓發する所あつて然るべしである。

第七圖

黑七を※印に打つ方が小目に着手するよりも打易い、之れ又參考圖として掲げて置く。

目外に懸る手は幾種ある乎。

第八圖

黑(一)なる目外に對し、白二と懸る手は(1)(2)(3)(4)(5)の五種で

ある。

他の配石の關係なく單に此處丈の得失を云へば、(1)の低懸りが一番利で、(2)の高掛り之れに次ぎ以下(5)に至る迄順次不利の度を加へる。

(3)と打つは能く々々の事であるのに、(4)や(5)を用ゆるに至りては頗る、非常の形容詞を盡し切れぬ程激しい場合の外は打つべきでない、損だからである、夫故目外定石としては(1)と(2)即ち低懸りと高懸りを攻究すれば足りる。

(1) 低掛り

- 拆
  - (1) 三間
  - (2) 四間
  - (3) 五間
- 夾
  - (1) 一間
  - (2) 二間
  - (3) 三間
- 掛け
  - (1) 小桂馬
  - (2) 大桂馬
  - (3) 大々桂馬

(1) 低掛り

第九圖

白二に對する黑の應手は拆と夾と掛の三種ある。

〔拆〕(い)(ろ)(は)三點の內其一に啓くが普通で、場合次第趣向次で其何れかが定まる、其評論は布石の部に編入するとして、今攻究せんとするは夾と掛である。

〔夾〕(1)(2)(3)の三種、

〔掛〕(イ)(ロ)(ハ)の三種

先程目外は小目の變と申したが、丁度今第九圖を眺めて居て考ふれば、最初白二とある處へ黑一と懸つた時、白が手拔した場合と同じである、夫故今黑三を※印に附ける要がない(第二卷五十六頁參照)

滔々として流出する亂雲の堆、一脈分れて兩派となり來る根源夫れ果して何れの處より起るや。

ア　夾

夾に一間二間三間の三種ある、けれども碁の最初に行ふべきものでない、之れ目外が小目と相違する性質の一ツである、左右の何れにか味方の石の援助がなくば事が急になり、夾んで却つて兩方の石を補はねばならぬ仕誼になる。其代り味方の石が左右何れかにある時は、守備と攻撃とを兼ねる良着を得る因となる。

守備と攻撃とを兼ねる良着を得ると云ふのは、例令ば第十圖に於て黑は五間の大拆をして居る、之れは模樣丈けで地ではない、誰れの領分と定つては居ぬ、黑は眞面に一着を費して(い)の邊に圍むのは拙の極で更らに碁意味をなさぬ、(第一卷本論を參照)乃で無償で此一着を儲けたいと思ふ時先づ(ろ)に夾撃を試みる、白が此際手拔すれば黑に(は)に被ぶせられて究屈な思で、僅かに邊陲に蟄居することになるから、白は(は)に尖み出るが普通

の應手であらう。

其時黑は(い)に打つ順を得る、而して其(い)は尖んだ白を攻撃する手で、左邊の廣い間を圍んだのは餘祿である、斯の如きを唯打てる順とは申すのである。

何故(い)が守の手でなく攻撃を兼ねて居るかと云へば、尖んだ白は次に(ア)と(イ)の二點を黑に占領せられると殪れる、だから黑(イ)に來らば(ウ)又(ア)に來らば(イ)に應ぜねばならぬ事となる、黑が封鎖して都合良い時は(イ)逐ひ出して勝手が良い時は(ア)に走つて十八目を唯儲ける、何れにしても毎着先手の利得をする順になる、だから能く々々の時でないと白は手拔をせれぬ、黑(い)が攻勢を取つて居る理由は即ち斯樣である

今申した黑の手順の中、始めに(ろ)からするか、又は(は)よりするかは塲合次第、趣向次第で、其是非は茲で論究する時機でない、要するに目外に低掛りした石を夾撃するは斯の如き塲合に起ると云ふ事の了解が參れば良い。

- ア夾
  - (1)一間夾
    - いろはにほ
      - 手抜
      - いろ
      - イロ
      - ハ
    - イロ
    - イロ
  - (2)二間夾
  - (3)三間夾

(1) 一間夾　第十一圖

白三の應手は(い)(ろ)(は)(に)(ほ)の五種ある。

(1)の(い)　第十二圖

白三に對し黑四は普通の應手である、然るに白五の打塲所が(イ)(ロ)(ハ)の三種ある。

(1)の(い)の(イ)　第十三圖

之れが普通の應對となつて居る、是から先白九の手を徐ろ

碁道の妙諦妙致自から字句の間に顯はる

に※に曲つて居るもあれば、此處で早く治まるが德と思へば⊠に打ち、敵に受けさせてから⊠印に尖頂るもある。

鳥渡茲で斷つて置きたいのは、⊠印に尖附する前に⊠に打つ手筋の事である、之が大に味を含む手で、圖を換へて第十四圖で申せば後日敵が⊠に攻入つた時、白は※に綽ね、敵が亙つた時⊠印に打つて一目抱へる時の用意である、夫故早い內に九と打つて黑の應手を問はねばならぬ、始であれば左上隅を慮つて黑は十と受げるが當然である、けれども後に其患なしと見る頃であれば、十に應せず白の十一の尖附を利かせぬ爲に、⊠印に受けるかも知れぬ、此一例に鑑みて碁は時機と云ふ事に注意を要する。

(1)の(い)の(ロ)　第十五圖

白五の一間飛は秀策の立案だと云ふ話だが、其時黑六は(い)と「ろ」との二つの打處がある。

白五を一間飛する趣考は其當時澁味あるものとして好評を得たものであつた、默つて棒に行ひたよりも働きあ

るものと考へられたのは、黑(い)の時に棒に繼いて前圖同樣にすることも、又他の打方をするとも出來る便があり、而して又黑が(い)に來らず(ろ)と二拆すれば、(ろ)と三つに膨れる(くの字形を作る事)形が働あるからである。

(1)の(い)の(ロ)の(ハ)　第十六圖

白七を※に繼げば第十三圖と同じになる、夫れを嫌つて櫓に打つたのである、之れから先興味ある接杖となるが、本編は定石の分類と碁意味に重きを措き、夫れは手筋の部に編入する事とせう。

(1)の(い)の(ロ)の(ろ)　第十七圖

斯くなつて白五が※にあるよりも働きある形をしては居るものゝ、此取組の可否は附近の形勢に依るので、之れ丈を以て其褒貶を云爲するのは早計である。

(1)の(い)の(ハ)　第十八圖

黑七の手の變化もあるけれども特殊の考案より來れるものであるから今は省くと致す。

(1)の(ろ)　第十九圖

白五は(イ)に行びるのと(ロ)に附けるとある。

(1)の(ろ)の(イ)　第廿圖第廿一圖第廿二圖

第廿圖に在つては黑三の勢力を無にして三の三の占領に趣いたもの、第廿一圖では黑九と尖んで白に三の三の利を與へたもの、第廿二圖では黑七と尖んで又九と尖むを豫定して係つたもの、三者形は異れど質は同しである、併し後の二圖は黑が左右何れか手近に己が味方がなくて斯く打出すは無理なることは申す迄もない。

(1)の(ろ)の(ロ)　第廿三圖

白が兩附する場合の定跡で、之れが此部門に屬するものゝ中で最も通形となつて居る、白**九**の手で**十二**に切るもある、手順が一つ間違ふと中々厄介な事になるから、塲合を見計つて手を下さねばならぬ。

此結果を見て左右×印邊に黑軍が居なくば、始め一間に夾むのが無理なることが知れる。

前卷に定跡の定義を下して置いたが、尙一方から觀察すれは定跡は公理でもなく眞理でもない、昔の碁伯が打出した手筋を取つて後輩が其儘之を偸用したものだとも云へる。

併し後輩が之を偸用せんとするのでなく、他に手段を講せんとはしたが、矢張夫れが得策であると認めて、即ち意見が計らずも先人と一致して、同一の航路を取つたのだと解釋することも出來る。

斯樣な次第であるから先人未發の創案が生するかも知れぬ、だから定跡を以て公理公法と見做してはならぬと申すのである、碁始つて己來己に

幾多の改良が行れて今日に至つた、將來尙校訂すべきもの多々あるであらう。

從來の碁書の中先人が打居いた碁譜を拔取つて其儘夫れを定石の部に入れたのが多い、だから定石は一面には古碁の跡と云ふても差支ない。

(1)の(は) 第廿四圖

手順の相違がある丈で、是から先黑**八**を(い)に行ひるか、(ろ)に尖むかで、第廿一圖や第廿二圖と同一のものになる。

白が先づ**三**と黑**二**に衝當るが良いか、**五**と頂けを先きにすべきかは、白が機に臨んで敵に注文を附ける心持次第で定まるので、之れに對して是非の論はない。

(1)の(に) 第廿五圖第廿六圖

第十一圖の(に)の塲合は此二種ある、黑**七**の手より先は定石の內に入れないで之れで止めたのは、小目の一間夾以來本

碁の初歩の間は下劫すなわち不利なる知らず道理を進めず忌み嫌う位低く進む斯くの如く敵の壓迫するなる所と厭ふなる脈とのなる念慮なる之れ未だ釣合ずる全局大に観ずる技に至らず熟して及んで始めて個せず倚せず廣き洋々海の如くなる

圖までの例に徴して後の打方を推究し得られるから、記載の要がないのと、又二つには其運用法に就ても更めて申述へる迄もないからである。

(1)の(ほ)　第廿七圖

白三と尖附けて隅に眼を持つも一策で、碁勢上之に限る場合もある、他の航路を取つて徒らに漂浪するのが却つて愚なることもある、碁は一概に押付けられてはならぬとのみ考へるのは狹い了簡である。

(1)の手拔　第廿八圖

白が手拔すれば黑が打つべき好着點は三の處である、斯くても尙白は全く息絶へた譯ではないが、之れでは白が割合損であるから、特殊の場合の外は手拔は出來ないと心得て可い。

(2)　二間夾　第廿九圖第三十圖

此二圖が二間夾に於ける通形である、其何れを用ゆべきかは場合次第で定まる、白四の手を拔くことは之れ又非常の場合でなくばせぬが可い。

(3)　三間夾　第卅一圖

二間夾では尖出しが普通である、三間夾となると其隅で治つて居る方が割得となると云ふ一事を忘れてはならぬ。

昔は黑六の手を先づ(イ)に覗いて白が(ロ)に應してからにしたが、夫れでは事が極まり過ぎて味が殘らぬ所から、今では默つて圖の如く打て置いて、後に下から※に覗く手を含むが優るとなつた。

掛ケ

(イ) 小桂馬　第卅二圖

小桂馬掛けは小目の部で委敷申置いた、今更夫れを繰返へすでもあるまい、茲に列ねたのは分類法の順序を附けるが爲めである。

併し前顯のは夾まれた時に行つたもの、今は夫れなしに打つてある、先のと今のとは其相違がある、圖の如く打出すには凡そ三つの場合がある。

(1) 第卅三圖　所謂一三五の碁形に於て黑八と尖んだ時、單に十三と拆かないで、九から十一までの小桂馬掛けをして居いて後、廣く十三と拆く趣向に出る時、

(2) 第三十四圖　之れは摸範とすべき石立ではないが

小桂馬掛を使用する意味を告げるには充分であらう、扨て斯の如き布石となつた時、黑十三の打場は色々あるから迷ひ出す事になる、九から右下隅へ向けて發展すると同時に、白の四と八の陣中へ切入る楷梯を作り度い考も起るであらう、又白十を夾擊に出で二と十二の大桂馬の陣地を空虛にする作戰もして見度くなるであらう、或は五と相須つて白六を夾擊し五と七の廣い拆を己が領土にしつゝ下邊の中腹にも據りたい考も出やう。

併し十人十色の考はあらうが、(は)は少しく碁の石立に通曉したもの、又は常に先輩の碁を見馴れた士の眼を着ける第一のものであらう。

處が五と六の距離が三間ならば夫れで問題は起ら

ぬ、此碁では四間である、而して白六と八は低い處に陣取つて居る之れが眼の着け處である。

黑十三で(は)に打つた時、白が何れに來るかと云ふ事を豫想せねばならぬ。

白若し五と七の間を衝く時、黑假りに(ち)に來るとすれば(い)に小桂馬掛をすれば、白は唯々として(ろ)に應するが如き常套を襲ふものならば天下の事は與みし易いが、そうは問屋で卸すまい。

黑は事勿れ主義、即ち平和論者である、先着を得て居るから丸く治ればそれで澤山、其上望む所はない、衣食足つて禮節を主張して居れは可いのである、白を持つ身になると境遇が違う、黑に甘い汁を吸はれた後を收め得るに過きぬでは、銷衰して終に身が立たぬ、夫故主戰論者たるは當然の數である、主戰の要ある地位の白は事あれかしと待受けて居る、少しでも敵に隙があれば之に乘せんと欲する。

八にある味方が低地にある以上、今又(ろ)の低地を匍はされては承知がならぬ、(ち)に放つた遊擊隊と相呼應せんと(に)突出で黑(へ)と約へた時、(と)に切つて茲に修羅の巷を演せんとするかも知れぬ、そうなつたからとて別段白軍に有利であるとは云へぬけれども、今申した如く黑を持つて上乘の法とするは、危地を履まずして勝を制するにある、紛擾を釀す欠なからんを期するにある。

だから此場合では白が五と七の間を侵さぬ前に(い)に小桂馬掛をして置いて後に(は)の如き好着點を占

あの面白さを聞く時はヨットよし良し

(1)は第卅三圖の場合

むるが手順である。

そんなら七と拆く前に小桂馬掛をして置くが可いでない乎、要らぬ心配をしないで濟まう抔と云ふ輩があるかも知れぬ、が夫れではとんと聲にしおりがない。

無暗矢鱈に小桂馬掛をするは損の骨頂で、之をするには時機がある、實は(1)の趣向すら普通好まぬ所である、本圖で白が十二と打つたから此掛けが必要と申すのである、那邊の消息讀者須らく沈思默考すべきである。

(ろ)

第卅五圖　之れも亦感心せれぬ石立で、白十二と打つは飛んで火に入る夏の虫の樣に、氣の利かぬ事夥しい、黑が夾(ひさま)と拆を兼ねる良着を※に求め得られるからである、夫れは扨て擱き本圖では其良着にも優るものがある、黑先づ十三に掛け、白を十四に應せしめ、又一方十五と掛けて十六十八と三の筋を甫はせる、斯くて先手を保有して※に夾み、自(おの)づと左側を堅める抔重ね〳〵黑の打廻が上卦(うけ)に入る。

斯樣な場合にも小桂馬掛が應用さる。

〔附加〕此理を呑込めば第三十六圖の如き場合に黑一の目外に對し白は低く※印に懸ることの愚なることが知れやう。

第三十七圖

黑四の手の變化で、斯く一間飛ぶもある白七を手拔するは非常の損失であるから、普通は(い)に飛んで居る。

之れは白が忍辱して居る時で、後日此黑壁を無効にせん存念あるか、又は次圖の如く黑軍をして益堅壁を築かしむるを慮る時である。

第三十八圖

此處でも白九は(い)に飛んで居るが普通であるが、手拔したとて差支はない。

白(ろ)に尖附けた時、黑(は)に應するが形で、稀には※に下がることもある、之れは先手を取りたい時である、常は好まぬ。

ウ　大桂馬掛け　第卅九圖

目外の定石と云へば人は必す大桂馬掛けを聯想する、大桂馬掛けが目外定石か、目外定石が大桂馬掛けかと云ふ程である、此八釜敷い定石も近頃は餘り流行せぬ樣になつたの

は、研究が能く行届いて、自家の創案に成る手を打つ餘地がなくなつたからである。

白を以て此定石を仕掛れば、今日では黑を紛れさせ難いのと、早く敵を堅めさせる不利とがある、斯くて盤上戰鬪の餘地をなくする恐れがある。

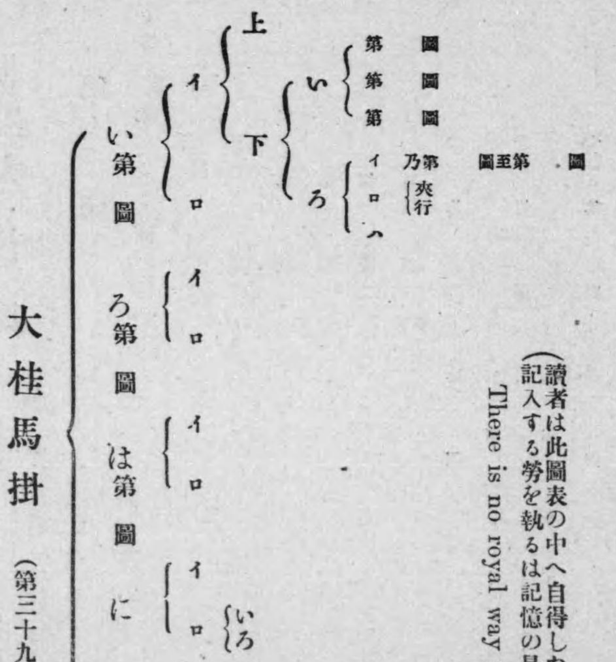
黑を以て此定石を仕掛れば、捨身になつて居る白軍を相手にする事だから、危險の恐れがある、だから成るべく之を避ける傾向を生したのである。

碁の極致は銖錙の爭にある、夫れに就いて佳成細論を下した碁書は數多ある、本書は大桂馬定石に就いて讀者を飽かしむる程管々しく述べ立てんより、廣い方面から自然と理解の出來る樣に企てゝ、今は此定石の概念を讀者の腦裡に吸入せしめば足ると思ふ。

此概念を得る爲めには分類法を立てたが可い、今日迄之れが整然と立てられなかつた、夫故初心が此込入つた定石を呑込むに不便であつた。

分類を明にするのは記憶するにも、又利害や運用を識別するにも便利で且つ調法である。

讀者が若し徐ろに左表の示す分類に依て、各種の定石の所屬や系統を自ら會得することが出來たなら、此複雜なる大桂馬掛けの性質を簡易に呑込み得ると同時に、筆墨や口舌で盡す能はざる幽妙の基味を嘗められるであらうと思ふ。



（讀者は此圖表の中へ自得したる圖の番號を記入する勞を執るは記憶の最良法である）

There is no royal way to learning.

(ウ) 大桂馬

(い) 第圖
(イ) 第圖
(上) 第圖
(下) 第圖
(ロ) 第圖
第圖
第圖
(ろ) 第圖 共一 其二
(イ) 第圖……第圖
(ロ) 第圖 夾 行 第圖 共一 共二
(ハ) 第圖……第圖
(ろ) 第圖

(イ) 第圖
(ロ) 第圖
(は) 第圖
(イ) 第圖
(ロ) 第圖
(に) 第圖
(イ) 第圖
(ロ) 第圖
(い) 第圖
(ろ) 第圖
(ほ) 第圖

表に依て、目外の低掛りを大桂馬に掛ければ、其應手は(第三十九圖參照)(い)(ろ)(は)(に)の四種と、手拔の(ほ)と五つに分けるが

當然と見られる、扨て(い)(ろ)(は)(に)の四つが各(イ)(ロ)の二つに分たれ、夫れから又小技に花が咲き出して居る、殊に「い」の「イ」の(下)は大分に複雑で、其他は(に)の(ロ)が亦岐れて居るのが知れる。

(い)の(イ)の(下)の(ハ)や(ろ)は、往時餘程研究されたものと見へて、彼れではない此れではないと色々に打方を變へて見た經跡がある、此種の打方は變化が多いから白持つては斯くなるを望む所である、それは兎に角として其系統や其所屬が詳にされ得たなら、從つて此定石の爭點が何れにあるか、何故其變化の着手を撰んだかが知れやう、五分に別れんとするは碁の本義であるが、多少計算を離れてもと云ふ趣向の存するものあるは何故か、其眞相も亦自つと知れて來るであらう。

(い) 第四十圖

(い)の場合即ち白**三**と附けた時、黑**四**の應手は(イ)と(ロ)がある。

(い)の(イ) 第四十一圖

黑**六**の手迄は當然の結果で、扨て白**七**に及んで上繼下繼の別が生ずる。

(い)の(イ)の上 第四十二圖第四十三圖

白**七**の上繼が常は損な事や、而して此定石が先手取る時に案外都合良い場合のある事は、第二卷劈頭に於て申置た。

第四十二圖白**十一**を※に行びる事もある、夫は黑**二**を征(しこう)に取れぬ時である、第四十三圖は即ち其れである、黑**十五**は普通逸す可らざる所で、手拔すれば白から(イ)(ハ)と二段綽ねさ

『文句の付く定石』と『苦情の種』と云ふ言外の意味ふべし

『他の場合に應用する考へて研究すれば其の價値増すの道理を實戰に應用する』

れて圍まれる、夫れを無理に切開かんと、十五に切つて後、(ハ)を抱かへると、界中に手を生ずる、即ち白二の引出しが利いて來る、夫故緩い樣ではあるが十五と飛んで後手を取つて居ても後れはせぬ。

(い)の(イ)の下　第四十四圖

下繼は文句の付く定石である、殊に白九の打處(い)と(ろ)の二ケ所の内、(ろ)の引出しは苦情の種で、其處に格闘の眞味がある、好んで打出すべきではないが、此定石の跡を溫ねて力戰の他の場合に應用する考で研究すれば、其價値増すの道理である。

(い)の(イ)の下の(い)　第四十五圖

見飽のする程人の知つて居る定石であるが、單に互角の分れと承知して居た丈けでは碁は上達せぬ。

現代の棊戰に資する筋なし其手の意味に通ずの曉がれば力に效あり戰に徒らに古型として顧ざるは其價値なる失ふ道理なるべしとの意なり

白を持つては餘りに眞面目に過ぎて居る、盤上四分の一は早や之れで始末が付いた、殘りの四分の三で敵に追付かねばならぬ、敵は己に一着先へ進んで居る、碁の戰局が狹くなつた丈け白に不利である。

夫故此取組に了つて白に差支ない時は、十七が右邊に何か効力を著はす場合か、さなくば星下☒の邊に敵軍が陣取れる時、敵軍を重複させる策を立てた時である。

と云ふ次第は、十七を手拔するは能く〳〵の場合でなくば損で、若し果して手拔すれば、黑に※印から攻め立てられ、非常の不利を釀す、夫故通例十七迄打つを此定石の完結と見る時は、黑は先手を保有し乍ら五分に分れた事になる、此因をなしたは九の手にある。

勿論九の手で十に行びたとて、夫れが必ずしも良いとは

奢る者久しかず黒好調に乗じて☒印に拆けば忽ち拆すべし思はざるけんや

定らぬ。其可否論は下繼の(ろ)の部で致そうが、兎も角**九**の手の時に考へねばならぬのは、敵に先着を保有せしめる順となる一事である。

十五の時に**十六**に打てるなら話は面白いけれども、さすれば黒は**十六**の手で劫を取り、白劫立の時脇眼もくれず**十一**を打拔くであらう、夫程の劫替のある碁は異數の例である、己に**十五**を**十六**に打てぬとすれば、此結果となるは自然の數である。

然るに斯くなつて黒が割を喰はずに確な石立となつた丈け儲けもので、其上茲で先手とは何樣の御法事と打喜んで、☒印に拆けば、事柄は一轉して前の利益は棒を引かれて稍足が出る勘定となる、……堅い方から僅かに大桂馬に發展したのでは、堅い事が八重て他の方面に石不足となるからである、……(黒は一目丈け先へ打てる丈けの事で盤上常に同數ならんとしつゝある互先の碁であるから)

勿驚天下は廣し評者は亦其豪著と解すること一人たるなを知らずや

夫れとは手順に前後の相違がある丈けで、黒が己に☒印にある時、此定石に組み得たなら白は儲出しである、之を働があると稱へる、(黒も始め星下に己が味方があれば斯うは打たぬは勿論の話であるけれども、若し斯くする豪の者があるとすれば)

夫れと同し筆法に、☒の御隣に白が(三間夾)ある時、此定石にするは矛盾である。

第四十六圖

(い)の(イ)の下の(い)の其二

黒**十二**の手の變化で、前圖に比して黒が損である。

此定石に就ての細詳を略して、唯一つ茲に注意して置き度いのは、白**十五**の手である、此定石に限らず凡へて斯の如き場合に、**十五**と早手廻に打置くが肝要で、打易き樣に

見へて實戰中打得られぬものである、無意味に此定石に馴れた人は此事を左までこ心付かぬであらうが、盤上に斯く併べて斯の如き他の凡ての場合に鑑るは徒爾の擧ではあるまい。

那邊の消息を自力で悟つた上でなくば、實戰に臨んでは後れる樣な氣がして打つて居れまい。

何故之れが前圖に比して黑が面白くない乎、又黑を持つて尙更宜敷ない乎の理由は之れ又讀者の自習に委ねると致そう。

(い)の(イ)の下の(ゝ)其三　第四十七圖

黑十の變化で白三を打拔かないで行びたのであるが、昔から名人の打つた例がない、一見左程黑が惡くはない樣に見へる、名人の碁に此定石を使はなんだには何かの意味がなくて叶はぬ事である、我が圍碁原理を之れ迄熟讀玩味し來れる向は一こ事心付かねばならぬ事がある、夫れは何んであらう乎。

申す迄もなく先手後手の事である、前二圖は白手治り、之は黑手治りである、黑が茲に後手を取つた丈けの利があるや否や、殊に碁の打初に方つて他に先鞭を著くるの要ある箇處なきや否や、之れ等を考へなば思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

黑十四は(ハ)に超すもある、白十三を(イ)に打てば、黑は(ロ)に掛けるが手筋である、夫れでは又黑が良くなる。

亂に黑十を行びないで白三を取るが良いと申した、而して今白十三を行びないて黑二を取るは惡いと云ふ、碁は取つて惡し、取らないで惡し、一體全體甚麼すれば宜いか」とこれる仁もあらうが、千變一律に往かぬ所が碁で、其取捨が活劇に處する技量の岐路となるのであるから、一つの定石に就て長く委しく研究するが、却つて上達の捷徑となる。

(い)の(イ)の下の(ろ)其一　第四十八圖

御待兼の白九の伸の場合である。

白十一を次圖の如く打つのと、本圖の如く一、七、十一と三本伸びるとある、次圖第四十九圖(い)の(イ)の下の(ろ)其二は三間夾の時稀に打出す趣向で常は損である。

夫故(い)の(イ)の下の(ろ)は本圖を以て代表者として支障はあるまい、乃で黒十二は何れに擲つべき乎。

夫れは(イ)(ロ)(ハ)の三つある。

(い)の(イ)の下の(ろ)の(イ)　第五十圖

之れが基本定石となつて居て、之から割出して他の變化と比較して得失を論するのである、即ち白十三を※に曲ること、黒十四を十五と☒に打つこと、黒十六を×印の何れにか飛ぶこと、黒十八を⧄印に大々桂馬に走ること等の變化がある。

第五十一圖

白一と曲るは無理である。

之れ丈けで物足らぬ心地するならば、方圓社發賣の高崎七段の奇手錄を參考にしたが可い、何れになるとも白が良くない結果となる、夫れに就て定石と定むべきものがない、對局者の腕次第で種々の變化となるけれども結局白の無理が白自身に不利を招ねくのである。

併し敵に斯く曲られた時思案に困るとなら、始めから他力を藉らんとする無性をしないで、先づ自ら攻究するが道である、夫れでも黒が思はしい結果とならぬ時は、始めて他の參考書を見る、其時は書中の良手が腦裡に印象するものである、第五十一圖其二其三其四其五は今眼を通してはならぬ。

第五十二圖(其一)

白八の手を(い)に打てば黒に(は)と打たれ、絞られて寂滅となるは何れの碁書にもあるから、讀者には耳新しい事ではな

いが、次圖(第五十三圖其二)の如き場合に之が應用されることを心付ないものがある、定石の研究は其骸を捨て其髄を取れとは此等を申すのである。

黑十一と打つた拍子に白は十二と當て置いて、十四と押して居るが手順で、恁くなつては黑の不利である。

斯る有振れたるものを書中に列するは分類上其所屬を明にする爲め己むを得ないが、茲で一つ黑十三の手筋を告げて置き度い。

常の如く手拍子で(い)と打てば、白が(ろ)と掛繼ぐ手が良くなる、後に十三に劫仕掛を(多少無理な趣向ではあるが)して、茲は劫に負けて他に二着連發を企てるのである、殊に劫種が豊富であれば十四の一着を略し、此白を其儘にして直ぐに(ろ)に打ち置き、黑十四に赶す時劫を始める手段に出る

半手先

かも知れぬ。

然るに黑十三と下がつて居れば、(ろ)の手は單に十二を繼ぐ丈けで、碁の打始では事が小さい、夫故白が之を繼ぐ順を得るや否やが疑問となる。

此場合に半先手に白に繼がれるは黑の身に取り嬉しい話ではあるまい。

能く碁書に黑の方惡しとか、白大に吉抔とあるは、僅かに數目の損得である、だから碁を打つて敵が碁書にある損の方に取組んだからとて『甚だ相濟まぬ事ですが、軍配は當方へ向けて貰ひます』抔と悦に入つて居ても、計算してオヤ〳〵と叫ぶ事があるのは、僅少の利を大利と思込んだからだ、碁書は錙銖の爭をも深く注意するので、夫れ丈のことでは笊碁黨の後の失策の大なるを埋合はすこと

大變な手

が出來ぬ、然るに十三の手を(い)に打つて敵に(ろ)を掛繼がれる仕誼になつては大變である。

大變な手とは碁打仲間の通用語で、惡手を通過して夫れ以上に位するものを申すのである。

第五十三圖(其二)

白三と切る手は初段に五目以下は氣が付く者稀で、黑四となり白五と行びてからは、井目連でも(い)に取りに來る樣な迷手は下すまい。

處が之から先が面白い。

「見て許り居る强い奴」はそんじこ其處邊に幾多もある、此「見物初段」が傍に居て「白に三と手たれる手が氣が付かぬ樣じや駄目だ、オツト危ぶない、(い)へ打つと皆んな取られるよ」抔と加勢する、夫迄は見物初段の箔が剝げないが、扨て此處だ、

比喩輕妙

黑が迷誤附て居ると「(イ)に曲るさ」と應援する、乃で白(ロ)に行びると又「(ハ)から押へて居ないと目に逢ふよ」と二度の助太刀か入る、白は默つて(ニ)に抱へて居ると「先づ小難で濟んだもう宜からう、他處を打ち給へ」と云ひ乍ら忽ち頓驚聲「ヤア大變々々、待ち給へ、※へ打れると又遣られるぞ」で、玆で後手となる、御節介な助太刀もあればあるものよ、骨を打つて白に先手で廿餘目儲させては、敵に貢ぐに等しいではない乎。曩に白に三と切られるを心付かなつた其迂を罵る資格があるなら、態々敵に糧を齎らす樣な(イ)や(ハ)の如き大變な手は教へらぬ筈である、玆に於て「見て許り居る强い奴」と云ふ事を白狀して了ふのである。

一人の魯鈍者があつて竿で月を突かんと企てゝ居た、傍らに見て居た利口者「馬鹿な奴だ何故屋根へ上つてせぬか」、之れで馬鹿者の御愚の落語になる、見物初段

は常に此滑稽を演ずるのである。

六の手に至つて氣が付いたら、乃で他へ轉ずるが良い、若し此處を打つなら(ろ)に抱へて居ればよい、先手である、(イ)と打ち(ハ)と約へてからは捨てるは惜しく後手となる、氣の利がぬ話ではあるまい乎。

第五十四圖

(い)の(イ)の下の(ろ)の(ロ)其一　黑一と赶すのは從求は斯く七迄五聯の棒を作つて居いて九に打つと云ふが眼目であつた。

斯くなつて黑一以下が浮足になつた丈け面白くない、殊に此打方は黑が遣るべきでなく、白持つてする藝で、而かも今は人口に噲炙されて居るから、斯くなると決まると、白が遣つたとて末の樂がない。而して現に損である、稀には十二と打拔くべきを、二十二に行びて失敗する初心も

ある。

本圖では九、十一の黑も浮いて居るから白が有望であるが、若し十二を二十二に伸びれば次圖第五十五圖其二の如くなり、却つて黑が浮足になる、殊に黑二十三が働のある手になる。

第五十六圖

一方一、三と赶し、又五と行ひると云ふ所謂兩行の趣向である、其時白六と斜走するが手筋で、(イ)に添ふは常に好まぬ。其仔細と申すは斯樣である。

白六と斜走すれば、黑が(ロ)に附けた時(イ)でも(ハ)でも、己れの都合の良い方を擇ぶ自由が利く。

然るに(イ)に赶して居れば、黑が(ロ)に綽ねた時、六に綽ねるの一手である。

前者は二た道かけられるに、後者は一と筋よりない、塲合次第で何れにも捌き得る六の斜走を擇ぶか手筋となる所以である。

始め六と斜走つて、黑(ロ)と尖付けた時、(ハ)に伸び得る塲合は、(ロ)の黑が征に取れる時でなくば不可ない、第五十七圖は其説明である。

第五十八圖

之れは第五十六圖の(イ)に衝當る塲合で、(ロ)が征に掛らぬ時に用ゆるのである、之は秀策時代の打碁の跡で、白熱戰の光景を呈して居る。

三五、三七の附引をしたのは、左上隅に敵の備があつたからで、夫れが無い時に此筋を辿れば損である。

今日では斯る短兵急なる接戰の結果が能く調査されて

居るから、無暗に亂擊の擧に出でない、竹刀の音をさせないで呼吸で、應戰すると云ふ澁味が出て來たが、そうかとて此の如く入亂れた激戰の苦味を嘗めた上でなくば物にならない、机上の論や疊の上の水練では駄目である。

日露戰役に於て其統率の任にあつた人は、日軍は維新の革命に苦鬪の辛酸を嘗めた士で、露軍は貴公子育が多かつた、夫れが勝敗の別れる原因と見るべきだとの觀察論は、着眼が高い。

道策の三間夾も革新から來た創案であつた、秀策が斯く打出したも亦先人未發の着手であつた、然るに後世夫れ等を以て金課玉章と心得、聖賢の敎に乘く可らず、天理に悖る可らずと云ふて居ては碁は進歩せぬ、夫故秀和も之を換へ、秀甫も亦之を變へた、秀榮亦向上の志あり、現代に

定石未だ眞理たらざる以上、時と共に推移せざる可らず斯くて後終に眞理たる全ふする定石を得ん

入つて碁界愈攻究改訂に努めて居る。

だから我が愛讀者は此種の定跡に鑑み、其意氣の存する所を取り、其型の古びたる處を去らねばならぬ。

此時代には斯く格闘した結果那邊に到着するかが不明であつた、御先眞暗であつた富士の根の裾の大洞穴の暗の樣であつた、仁田四郎が松火で探つたら夫れが龍宮へ通して居たとさ、今日では瓦斯電燈で不夜城の光景を呈して、三途の川に潜航艇が往來して、時折亡者の乘合船を沈沒させては蘇生へらせると云ふ事だ、昔は窪の穴が少し深いと、早速「龍宮へ續く」と云ふたものだ、創葬の時代に多少とも探險した勇氣は、現代に於てX光線で透視する發見にも劣らぬ功績である、碁始つて以來茲に幾百年、現代の燦爛たる斯技の美は斯技の殉死者の上に築かれて居る、其功や沒す可らずである、併し何時までも青龍刀を振廻はして居ては追付かぬ事に心付かねばならぬ、若し夫れ此種の定石の細を知らんと欲せば、野澤氏の大桂馬掛け抔は參考とすべきものゝ一であらう、

區々の論よりも此書の大要論寧ろ細微を穿てり

我が書は先づ其體を告げんと企てゝ居る、其體を詳にするを先とせずして先つ其質を知らんとするは迂である、投藥すらも其體に應じて分量の相違がある、細を後にし、粗を先にした所以、讀者の賢察を仰きたい。

打碁の跡

白十二から切つたのは、之を十三から切つて先手に十七に繼いだなら、目前は良いが、其結果として黑に外壁を厚ふされる、夫れが辛らいから、此擧に出でたので、尤も劫立ての數を增さん存念なる事は勿論である、白二十二を單に二十八に打てば、白は酷い目に遭ふ、劫立の數が不足する許でない。

本圖は白が幾分面白くないけれども、碁は氣合である、徒らに敵の意中を行くべきでないから、幾回も同し敵と對局する裡に此作戰に出たので、之を定石と名付けるは無理である、打碁の跡とした方が穩當に聞へやう。

此種の定石種々の變化があるけれども、一々擧げて論究するに及ぶまい、國技觀光以來方圓新法迄の古碁譜を參照さ

れたい。

(い)の(イ)の下の(ろ)の(ハ)　第五十九圖

今度は黒一を右の方へ行ひた時の場合で、白二の應手は(い)と(ろ)とある、普通は(い)に走つて居る。

初心が思違するのは毎時も恁う云ふ時で、(ろ)の(ロ)と混同することがある、殊に布石の向が違ふと、中指先に瘤の付いてる手向(べん持つ跡の御隣)でも感違をする恐がある、部門を立てゝ此患を除かんと謀つたは著者の微衷である。

中指先に瘤を生ずる程の者は永年の好き者なり

第六十圖

(い)の(イ)の下の(ろ)の(ハ)の代表定石は古來之れである、白十四と綽ねた時、黒十五と二段綽をするが筋で、此時白(い)と切るは損で、尾張地方では之を淺井膏藥と名付けて居る、傷を愈

淺井膏藥傷癒し

やすからである、白果して(い)に切れば黒は十七に打ち、白(ろ)に黒の十一を取り、黒(は)に當てる、白十一に繼いだ時、黒は(ほ)に掛繼げば忽ち良い形になつて、白は徒らに敵の傷を愈やしたに過ぎぬ。

此定石となつて黒白何れが良いか悪いか、抽象的に之れ丈では左まで甲乙を云爲することは出來ない、要は附近の布石の模樣にあるから、其心して場合に適合する樣にせねばならぬ。

(い)の(ロ)　第六十一圖

本圖は事柄が全然變つて外から綽ねた場合である。

黒五は三の三の利を思儘に占有し得るから申分はない

が、場合に依つては左上邊に向けて拆くもある。

白六も時に或は二間に狹く啓らくのもある、對角隅と見合はして征の的を慮るに因ること等は已に第一卷で申置いた。

白六と拆いた拍子に黑は※に押して居るが得と云ふ新說もあるが、餘りに現金主義である、果して夫れが良手と定れば、白六と拆らく前に※印に曲がつて置いてからせねばならぬ、今は其時機でない、左邊の配石の模樣の出來を待つて後に思案すべきである。

(ろ) 第六十二圖

題が替つて白一と尖んだ場合となつた、之に對する黑の應手は(イ)と(ロ)の二種である。

萬解の熱血北一節に溢る平易の叙體裡に基道の藴奥を告ぐる所頗異彩あり

(ろ)の(イ)

黑二を若し(イ)に應すれば手順が違ふだけで、結果は一間夾と同一になる。

(ろ)の(ロ) 第六十三圖

白一の尖は無論本圖の如く黑に壓迫されるを豫期せねばならぬ、此處丈けでは白の不利なるは申す迄もないが、(い)に附けては他の布石と矛盾するから、斯く忍辱して居るのである、此見地より白一の着手を擇ぶので、之れが普通の分れ、互角の取込と思ふてはならぬ。

(は) 第六十四圖

之れも場合定石で好んで打出す型ではない。

説明簡にして要を得

(は)の(イ)

白(イ)に約へれば矢張一間夾と同様の形を得る。

(は)の(ロ)　第六十五圖

小桂馬掛した時とは黑二の在所が違ふ、其時は黑二が※印にあつた、夫れと之れと得失如何にと云へば、多くの場合黑二が白一に接近して居ない方が面白い、即ち本圖の方が黑が働きがある、之を又他の方面から云へば、白一と打つは常は損であることが知れる。

(に)　第六十六圖

白一の下附に對し、黑二の應手は(イ)と(ロ)である。

(に)の(イ)　第六十七圖

丁度小桂馬掛けしたと同しになつた、可否の論より場合の見計であること申す迄もない。

(に)の(ロ)　第六十八圖

黑が圖の如く打つと事柄が稍複雜して來る、乃で白の應手は(い)と(ろ)とある。

(に)の(ロ)の(い)　第六十九圖

斯くて白九は※印に尖付するもあり、又他に轉するもある、普通は手拔せずして此處で治まて居る。

(ろ)の(ロ)の(ろ)　第七十圖

白七を※に抱へるは損である。

さすれば黑が七に約へ、白×に取つた時、黑に星へ打たれては白大なる割損となる。

さればとて此結果は白に身に取り嬉しいことではない、之が御氣に召さずば、始めに一と附け三と切る趣向に出ぬが

可い。

黑**四**と綽ねて白を**五**と行ひさせてから**六**と打ち、右せんと欲すれば即ち右せよ、左せんと欲すれば即ち左せよと、古の聖賢を氣取る所に趣がある。

併し黑は**八**と抱へて白の**三**を征に取れぬ時は考へものである、白も**三**と切るには此見界を付けてすべきは論な話いである。

此外黑**四**の手を默つて☒に打つもある、其變化は管々しい割に裨益する所大ならずであるから省くと致そう。

手拔　第七十一圖

白手拔すれば黑**一**と附けるが筋である。

エ　大々馬桂　第七十二圖

大々桂馬懸けは懸けと夾の合の子で、碁の途中に他の配石の模樣により之を使用するの却つて有利なることもあるけれども最初に起るべき定石ではない。

特に之を列擧したのは、目外に低掛りの石に對する攻擊手段を、夾にあらされば懸けとし、扨て其懸けを小桂馬大桂馬の二種に限るとして考へても、場合に適合せぬ事もあらう、其時猶大々桂馬に打つこともあり、又或は其隣へ尙一間廣く打つもあると云ふことを告げんが爲めである。

大々桂馬懸けは之を二間の高夾、其隣に打つを三間の高夾と命名するも差支ない、否や却つて夫れが適切である

かも知れぬ。

黑一に對する白二の應手は(い)(ろ)(は)の三種ある。

白又手拔するもある、未だ一手では呼吸は絶へぬ、前圖に比すれば餘程凌い易い、併し通例手拔は損である。

第七十三圖

前圖(ろ)の塲合で、斯くて黑七は(い)の肩繼と(ろ)の下繼と(は)の掛繼の三種ある。

第七十四圖

矢張第七十二圖の(ろ)の部で、白六の手は黑一が離れて居る爲め切斷の患がないからである。

されば黑一は大桂馬に比べて剴切な塲所に居ぬ事が知れる、其代り一方に利きが惡しても、他方へ都合良い事もある、低掛の石に對して多少利きが鈍いのは當然である。

存在の必要

第七十五圖

第七十二圖の(は)の部である。

別段之れと云ふ的もないに、力身で敵勢を二分にするも及ばぬ時は存在の必要と云ふ手を打て居れば可い、本圖は即ち其方針を採つたのである。

存在の必要と云ふ事は碁を打つに無くてならぬ方略である、之を解き易く説明するには丁度良い例がある。

明治廿八九年の役に丁汝昌が大丈夫らしい行動を執つて降を我に納れた、之れは東洋豪傑の典型にはまるけれども、一方から云へば存在の必要と云ふ軍略が如何に有力なるものかを知らぬ處がある、明治三十八九年の役に浦鹽艦隊が卑怯にも我が艦隊の留守を付込んでは武裝のない商船を脅した、而して我が砲聲を聞けば忽ち浦港

へ逃込んだ、此遣口は到底我が帝國男子の腦裡に思ひ浮ばぬものであるが、而かも又一方から云へば存在の必要を思ふての仕打であつたことが知れる、戰鬪力が弱いにもせよ、三隻の軍艦が一港に存在して居る以上は、夫れに備へねばならぬ、丈け我が軍備の幾分を割がれる勘定である、消極的に効力があるものと考へられる、楠公も千早城を捨てゝ再擧を謀つた時の感想は茲にある『生は難し死は易し』と廉頗と私爭を避けた藺相如も存在の必要を感じたからである。

併し餘りに此觀念を皷吹したくはないが、又餘りに單調なるを避けたいと思ふから、此一手を申置く。

歐州諸國の兵戈ふや殊死し其の強殆んど我が帝國男子の腦裡に思ひ浮ばぬものであるが、而かも又一方から云へば存在の必要を思ふての仕打であつたことが知れる、戰鬪力が弱いにもせよ、三隻の軍艦が一港に存在して居る以上は、夫れに備へねばならぬ、丈け我が軍備の幾分を割がれる勘定である、消極的に効力があるものと考へられる、楠公も千早城を捨てゝ再擧を謀つた時の感想は茲にある『生は難し死は易し』と廉頗と私爭を避けた藺相如も存在の必要を感じたからである。

併し餘りに此觀念を皷吹したくはないが、又餘りに單調なるを避けたいと思ふから、此一手を申置く。

高夾　第七十六圖

大々桂馬より又一間廣く打つ場合で、之れは夾の部に入れべきであるが、小桂馬から漸次一間宛廣くなつて來たものとして考へても宜からう、部門の別け方は讀者の氣隨に委かすと致す。

之れは趣向で、打初(多くは二子以下の手合に對して白からする)に遣ることもある、又夾まれた時、夾返の一の新方法として打出すもある、併し半間な手たるは疑を容れぬ、けれども白を持つては、殊に二子も讓つた碁には、畧あるものとして採用されて居る。

黑一に對し白二の應手は、塲合次第で(い)(ろ)(は)の内一を擇ぶのである、以下二圖は其參考譜である。

第七十七圖

黑七は(イ)に綽ね以下白(二)までの手順を經て後にするもある、後の味は殘らぬ代りに、(ハ)の締めを先手に利かす所が命である。

第七十八圖

此形は多くは※印邊に夾んだ時に起るのであるが、白は必しも六と綽ねるとは決らない、七に引いて居ても可い。

(2) 高掛

第七十九圖

目外の黑一に對し、白二と高く掛るのは此隅のみに就て云へは白は損である、けれども他の布石と關聯上斯く打つのが策の得たるものとなることが往々ある、次圖は其說明である。

第八十圖

右隅に黑と白が斯く對峙して居る時、黑三と目外に打つは良い思付である、白手を拔けば(ア)に三間に夾んで拆と夾を兼ねる良着を得んとするのである、夫故白四は明隅を差置いても、(イ)か(ウ)に啓らいて居たい、夫れは後に(ろ)に打つて黑三を要擊せんとの含である、だから黑五も夫れは堪らぬから、(ろ)に備へると云ふが布石の徑路となる。

けれども黒に三(ろ)と陣立されるのは、白の身に取つて嬉しくないから左隅に掛りたい、その時(い)と高掛する外はない。白若し(ろ)に低掛をせん乎、黒は得たり賢しと(い)に小桂馬掛をし、白(は)に應じた時、(エ)に行び、白(オ)に飛ぶ時、轉じて(ア)に打つ順となる。(時に小桂馬掛けを略して單に(ア)に打つもある)

之れは白の忍ぶ可らざる苦痛であるから、(い)と高く懸らねばならぬ、而してモ一つ其得策なる理由が付く。

其時黒(ろ)白(は)黒(に)となれば、白が先手を保有して居るから(カ)に一杯に詰めて、黒から啓かれるを遮ることが出來もし又其先手を以て他に着手した所で、黒は最早(ア)の要處を衝く効力が鈍くなつて居る。

此邊の碁意味が明かになつて居ぬと、話を進めても更らに効がないから、再ひ圖を改めて説明する。

第八十一圖

白が手拔した時、圖の如く黒一と打てば、白から二と掛けられて黒は三と應する外はない、次に白(ア)黒(イ)となり、白又(ウ)と行びるか、一間飛ぶか、何れにても黒一との聯絡を絶たんとするから、そうさせては一が孤立するから、黒は涙を呑んで三の筋を這ふのである。

さすれば黒一は堅い方から拆いたと同し(前卷參照)事に化して了つたので、毫も夾の主旨に副はぬ仕誼になつた。

白二の手は黒一の手をして不働(はたらき)なものとするには誂向で、常は黒を堅めるから好まぬけれども、此場合には遁(の)がす可らざる好着である。

要するに(い)の高懸りは敵をして三の三を擁護せしめるから、其隅では不利である、けれども斯の如き場合には使用し

て却つて有利である。

話は第七十九圖に戻つて、扨て白二に對し黑三の應手は(ア)と斜走に受けるが普通で、時には(イ)と附けるもある、又配石の模樣で稀には(ウ)に夾むもある。

ア　斜走　第八十二圖

白四と約へた時、黑五は(い)に下るか、(ろ)と副ふかの二た途ある其何れを擇ぶべきかは場合次第で其處が碁である、讀者は次の二例に徵して自ら啓發する處あつて然るべしと思ふ。

(い)　第八十三圖

白六は白を持つての趣向に出たのであるから、遽かに其可否を論ずる遑がない、併し次の着手と相須つて始めて其是非が云爲せられる、今茲で(白六の手を)單に十に備へなば、黑は七に據るは必定、さすれば一、三と五、七と二隅に兩守となる、乃で白の打つ手は盤上に殘りたる唯一の大塲、即ち※印を擇ふの外なく、斯くて守り守りの分れで、黑に先手を持たれて居る丈け、白が打ち難い事になる、事勿れで早や四隅は悉く終つて、殘りの爭地は邊と腹となる、而かも黑に先鞭を着けられる順であるから、衡を爭ふ餘地が僅少となる。

夫故黑に兩守をされるよりは、多少の不利を忍んで六、八と打置いて後、十と構へるのである。

著者の第八十四圖の説明を略したる所以は、評者窺知し難し、蓋定石と布石との混同を避けたるにあらずや

扨て茲で黑**九**を星に打つ「(ろ)の場合」よりも、圖の如く下がるが穩當である。

若し星に打てば白**十**を※印に三本連行させる拍子を與へる、而して又乃で黑が手拔するは、普通は損であるから☒に尖むとなると、本圖に比して白軍の上邊に於ける勢力が加はつて、黑が打難くなる。

第八十四圖

左上隅に**四**と**五**と斯樣な對峙をして居て、又右下隅白**二**が星にあるから何方からでも掛れる時、黑は矢張圖の如く**十一**と下つて居るが當を得て居る。

第八十五圖

黑**二**は白**一**に對し働のある手で、白若し低く**四**に掛り來らば、黑は×に打つ、×は白**二**を夾擊すると同時に、**二**から良い

間合の拆になる、夫を嫌つて白**三**は高掛を擇ぶのである、此時黑**六**は白**三**に副ふて上へ引き、而して**八**と尖む所以を作るが面白い、さすれば矢張白**一**を夾擊する含みになる。

含とは狙の事なり

若し黑**六**を☒に下れば、後に白**一**を夾擊する時、第八十一圖の如く低くされて、一向夾み晴れがせぬ。

第八十六圖

白**六**は手拔するもある、茲を打つとすれば(い)が普通であるが、右邊の布石と關係上必しも(い)に三間拆をするとは決らない、四間を取ることもある、又一方×印邊に敵の石ある時は、(ろ)なり(は)なりに打つて、(い)の着手を省くもある、其處に敵軍が陣取らずして、味方の兵が第八十一圖の右下隅の如く、

敵の石を桂馬に掛け得らるゝ様に對峙して居る時は、一抔に(に)に詰めて打つもある。

第八十七圖第八十八圖

此二圖は急に一抔に詰めた時の打方を示すもので、白が斯く打出すには附近の情況に依るので、即ち場合手に外ならぬのである。

第八十九圖

昔の定石集には白が六と約へて、黑七の尖と損な交換をしてから八と啓いてあるのがある、六と七と換へるのは損の骨頂で、當今は默つて八と拆く處に味があると云ふ興論に歸して居る。

第九十圖

之も前世紀の遺物で、若し伊達家の拂下とでもあるなら値

のする處だが、現代では賣れが遠い、そうかと云ふて四十年增が嫁入當時の衣裝に厚化裝で濟まし込む世の中、之れとても無下に孫娘の爲めとのみ藏へ納めても置けまい、八と附け九と綽ねられて、又十と綽ね返へす手筋は深く味はねばならぬ。

白十を(い)に行びては更張意味がない、斯く十と綽ねる時、黑若し(い)に切れば白(ろ)に繼ぐ、即ち次圖(第九十一圖)の二に打つことになる、さすれば白(ア)に附越が利くから、二の繼が先手になる。

『(ア)に頂越が利く』と云ふ事柄は、第九十二第九十三の二圖に依て判明するであらう。

第九十三圖の如く黑四と下がり得る場合でも、隅は白の蹂躙する所となる、黑十と繼いだ時、白※の繼が先手であ

るが、若し白が※に繼ぐのが先手にならぬ時は、決して其處を打たぬ、早や之れ丈の仕事をしたなら、夫れを打得として手拔する。

後に黑が※印に切れば、又手を拔く、夫故小さな所でも他で二た處の儲をすれば、其方が大い塲合が多い、夫故黑も浮ど※に切りに往けぬ。

從令又切つたとして、碁も早や終結に近付いた頃、白劫種は豐富であるが、碁が足らぬとあらば、×に綽ねて劫をすることも出來る。

夫故黑は九十一圖の(ア)に頂越された時は、次圖第九十四圖の如く受けねばなるまい。

が之れも又白に先手で荒らされる、一目を捨てねば味が悪るい。

何れにしても第九十圖で黑の(い)の切りは、毛を吹いて傷を求める道理である。

然らば黑(ろ)より綽ねて白(い)に繼いだ時、(は)に出ん乎、白に(に)に出られて隅を荒らされるか、(ろは)を切斷されるかになる、如上の次第であるから白十と綽ねるは手筋である。

白(ろ)に先手繼が利いて居る所と見れば六、四、二(ろ)八なる五聯の棒を九と綽ねられた時、(い)に曲がる道理がない事が知れる。

(黑に(い)と切られた時白は(ろ)に引くとは限らぬ、八を心よく呉れて遣る手段もある)

(ろ) 第九十五圖

白六と棒に行び、黑七と應するのが普通であるが、白六は時として(い)に一間飛をすることがある、又昔は(は)に下つたこ

ともあつた。

黑七は二三目も置かした碁抔では、（此場合黑と白と位置が天地する）(ろ)に打つことともある。其時白は(イ)に頂けるもあり、又は切を厭ふて(ア)に斜走するものある。

第九十六圖第九十七圖第九十八圖

第九十六圖は白が無理趣向ではあるが、七と夾んだは此十一の切を豫期したのである、黑は騷がず(い)の尻綽から始めて、隅の白をいぢめつゝ戰へば可いのである。

併し附近の模樣で十一と切られるが厭ならば、第九十七圖の如く八と打つのである。

夫れでも白は執念深く十一と切り來らば、圖の如く應戰する、斯くて白軍慘の又慘を極むるは見易い話である。

茲に又一寸面白い事がある、黑十二の手で若し第九十八圖

の如く行ひれば、例の絞が利く。

第九十九圖

斯くて白八の應手は(い)に拆くもあり、(ろ)に斜走するもある、其何れなるかは場合次第である、併し(い)に打つた以上は、(ろ)に斜走するは好ましくないと同樣に、一ト度(ろ)に斜走したらば、(い)に啓くは狹きに過ぎると云ふ一事を心得て居ねばならぬ。

其說明として次圖を提供する。

第百圖

白八と三間に狹く拆いたのは、一ツは黑に※に斜走されるを嫌つた爲めである。

若し之を(い)に四間拆をすれば、黑は直ちに※に斜走して、左上隅に向つて發展する爲めの地步を得ると同時に、白若し

此書纔然として棋界に頭角を顯はすもの之なし此一節に於ける定石の微解釋振に解すべし

手を拔けば、(ろ)に其急所を衝かんとするのである、即ち※は**兩口手**になる。

黒に(ろ)と襲はれては慘な目に逢ふから、白が此處に一着を要するとなると、**二**、**四**、**六**、い、ろ、の五手要かる、曩に**二**、**四**、**六**、**八**の四手で占領した地域よりも、多少大なるものを得たとするも、其差の一着分に値する程の得はないと同時に、黒に※なる好着點を先手で利せられた勘定になる。

夫故始めに**八**と狹く控へて置ので、夫れにも拘らず黒が※に來らば、手拔して他に轉ずる、だから**八**と打つた以上黒は碁の始に方つて※に來る筈がない、黒果して來ぬとすれば夫れを白が打つ急場とはせれまい。

始めに白が※に斜走するのは、敵若し右を襲へば、直ちに☒に冠ふせて、中腹や左上隅に發展せんとするので、**左右兩睨**

の手となる、三間拆が良いか、※の斜走が場合に適するかが不明の時は、一先茲を其儘にして置いて、模樣を見た上にする。智慧が出る樣になれば、柔道なら黒帶が許される。

(イ) 附　第百一圖

白**二**は塲合手であると申置いた、然るに黒**三**なる頂手は夫れにも優した塲合手で、右上隅に於ける征の的や、左右の布石の模樣を見合つた上でなくば、矢鱈に試みてはならぬ。

白**四**の手必しも此處とは限らぬ、(ア)に冲むかも知れぬ、其時黒下から星に打ち、白(イ)黒(ウ)となり、白**四**に綽ねて**三**を征に

取り得る時でなくば遺れない。

夫れかと云ふて、若し夫れが征に取れて外勢を張るに利ある時は、雙手を擧げて賛成せれる。

さすれば白(ア)の冲は黑を征に掛け得られる時に行ふのだから、黑は如上の次第で下から受けられない、(イ)と上から約へる外はない、然る時は次圖第百二圖の結果となり、之れ又黑が割が悪い。

黑十三の手で十六に繼ぎたいが、切があるから己むを得ない。

話は第百一圖に戻つて黑三と附けるのは、白に(ア)と冲まれて征の懸念ない時でなくば損と知れた上は、其用意ある時に行ふものとする、然る時は黑三に對する白の應手は、本圖の四が普通である、乃で黑五の打處は(い)と(ろ)と二ケ所ある。

(い) 自第百三圖至第百五圖

沈點は雄辯に優るとか やはり掲げざるは掲ぐるに優る

之れ等は第百一圖黑五を(い)に行びた場合である。

茲に新案として故意と百四百五の二圖を挿入しないで、讀者自ら此種の數多ある内二つを拔萃して、此に記入する爲めの餘地を存して置く、(參考書としては明治初年發行の定石集を漁るべきで初代中川龜三郎村瀨秀甫等諸名手の打碁を參照されたい)

(ろ) 第百六圖

白十二の伸は征に取られるからで、其恐なくば此手で十三に行びる、左樣なれば黑は悲慘なもので、五と切つた所以がなくなる。

だから黑二と切るには、四、十が征に取れる時でないと遺れない。

之は本來場合定石であるから、黑白何れが可か否かは、其附

近の模様次第で決まる。

此定石は黒を以ては好んで仕掛けべきものでない事と、**五**と切られたらだらりと**六**に行びるが良手で、※印に冲むは常は損と心得て大謬ない事とを承知して居たい。次の二圖は其説明である。

第百七圖

黒**三**と頂ける手は、無理にも急に左上邊に己が勢力を加へんと志す時に行ふ手段である、然るに斯樣になつては全然敵の意中を行くもので、**六**の手の迂愚なること論を俟たぬ。

然るに※印に白の石あるに拘らず、黒**四**と附けた時、此型になれば白は寧ろ働いたことになる。

第百八圖

十二は無理で之れでは嵌り手になる。

文中の(ア)と(イ)は分類記號にして圖解中の記號にあらず

昔から言囃されて居る所だから、大正の五年になつて今更らしく掲けるでもあるまいけれども、御約束の伸びてから勒ふ手筋を示したい爲めである。

尙此種の例を求めたいとならば、序に第百九圖を提供して見やう、白先ならば隅の白は生擒には逢はぬ。

第百十圖

目外に對し敵若し高く掛つた時、(ア)星下に斜走するのと、(イ)附定石をするのと、此二た通りは何れの棊書にもある、然るに圖の如く之を夾むと云ふ事は、未だ嘗て何れの定石集に

も列してはない。

打始に打つべきものでないから、定石の部に加へべきでないとの見地から省いたにせよ、定石を組織的に研究せんとするには、編入するが當然であらう。

「呼り初段」に三子位の人に、白が明隅に目外に打ち、黒は事を恐れて高く掛つたなら、黒の意表に出て斯く夾めば、十の九までは間誤付くのは事實である、さりとは面白い現象ではあるまい乎。

之れ一方に古い型の跡を辿らんとする腦裡の狀態を露に表示するのである、而して何れの型を漁つても思出せぬ處から、(ア)に打つたり(イ)に斜走たり、好んで敵の悪手たる三(最初の打出しとしては)を良手たらしむるのが多い。

三は斯く小桂馬に夾むも、又に大桂馬に夾むもある、其何

れにするも白は※印に尖んで居れば差支ない、次圖は其説明である。

第百十一圖

手順を忘れて考へれば、白一とある時、黒四と低く掛つた、其時三と夾むは左右に白の援勢なき時は、黒に二と尖まれて事が急になつて割が悪い、丁度其結果と同じ打方をして居るではない乎。

夫から又別な見解を立てれば、白一に對し黒二、四なる尖がある、夫れを夾んだのだから、黒が手拔して明隅の星に打たと同しだとも考へられる。

何れにしても薄弱な兵力を以て、左右から堅壘に迫つた陣形であるから、白の窮狀は忽ち現はれて來る。

『高懸りを夾んだ場合に尖む位の考は、今更らしく書立なく

も、乃公先頃承知之助と改名して居るに心付かぬ著者は、餘程緩めて居る』と冷笑する讀者の數が多ければ、夫れこう却つて著者の本懷とする所である、けれども手順が變ると戸惑する向は少くはあるまい、其時に際しての趣考の立て方を申上ぐるは、全く徒爾にはなるまい。

（第一）手順を違へて敵が打ち來る時は、其本手順なる型を思出すが必要で、手順が前後して居る丈け吾れが敵に乘すべき利がなくつてはならぬ筈である。

如何にして敵が正當の手順を失したるに乘すべきかの工夫が付かぬ時は、己むを得ず本手の順に戻る考を起す外はない。

（第二）手順の前後して居る事も、何にも更らに見當の付かぬ時は、己れの着手に對し敵が應するであらうと待

研究秘訣の眞價全く斯遂に存す

受けた處に着眼して、それに吾自ら着手するが一策となる。

例令ば百十一圖に於て黑二と打つは普通白が三の手を四に應ずると豫期しての事であらう、然るに今白は夫れに來らず斯く夾んだ時は、己れ其豫定の四に着手するのが一策となる。

『敵の打つて良い處、吾之を占領して大概は吾も打つて良い處である』として、胸中に先づ其處に打つたと見て、其是非如何を慮る、支障なしと斷ずれば初めて實地に石を下だす、之れが先づ棊客が對局に際して の心裡狀態である。

此種の考案方法を運用して容易に案出せれぬ突飛の良着を見出すことが往々ある、今其例題を掲げて

恰も良師座右に在るが如し

讀者の參考に資せんとする。

第百十二圖

黑軍の模樣斯の如く旺盛なるものがある、白が左(ア)に侵せば右側は忽ち難攻の城廓となり、右(イ)を衝けば、左側忽ち不落の壘柵と化する、此際此時己が着手の事を忘れて、先づ尙一着敵が茲に加へんとするならば、何れに來るが筋かと考へる、己れが敵の身になつて考へなば、必ずや×なるべしとの斷案が下るであらう、乃で……

敵が打つて良い處は吾にも都合良い處

ではあるまい乎との思想を呼び起すのである、勿論之れは兩翼均勢の形であるから「其中央に手あり」で、※印に打つも手になることは、已に申した處であるが、一方斯の考の方面からも眺めて、着點を見出すのである

初心は兎角近視眼で、彼々打つ、此々打つとから割出す、素人離れをして來ると、例の事から割出す、夫れが劫を經て來ると、奇想天外より落つるの觀あらしむる如き妙着を得る、此考の泉は「敵が打つて良い處は吾にも亦良い處」の句を誦しつゝ、敵が打つべき急處を見出して、而してそれを己れが占領せんと探る足下から湧出るのである。

通俗 圍碁原理 第三卷 終

通俗

圍碁原理

第四卷

小川文雄著

高目

高目は一に大目とも言ふ、小目に對するの稱である。目外が小目の正道に對して權道ならば、高目は奇道とでも申すべく、矢張小目の變態である。夫故趣向として用ゐるが多い、併し之れに限ると云ふ場合がないでもない、其時は布石が變形である、變形に應ずる正道は即ち變態でなければならぬのは其數ではあるまい乎。

高目の性質から考へれば、黑を持つ時好んで打出すべき

勝を制する要訣は先づの敵の狀を盡すにあり

ものでない、白を持つては變化を望む所より之を使用するのであるから、圖解は白の打つた塲合にするが當を得て居るかも知れぬ、此書は殊更に黑で說明せんと企てたのは、勝を制する要訣は敵の內情を悉知するにある、置碁の時の研究ですら先づ白手を知れと申置いた、況して互先定石に於ては黑手で以て攻究したいではない乎。

目外でも大目でも其根底は猶且小目である。

目外は小目に小桂馬に懸つた時、對手が手を拔いた場合として考へられる。

高掛は其特殊の場合になる。

高目は小目に一間高懸りをした時、對手が手を拔いた場合として考へられる。

三の三の打込抔は其特殊の場合になる。

定石を學んで定石に囚れず、自己創案の妙着を得よと、暗に之を諷刺するの眞意、深く味ふべし、讀者輕々に過す可らず

高目の性質を具體的に研究せんとするのが本編の主旨で、其應用の效果を擧げるは之を讀者天賦の英資に待つの外はない。

第一圖

黑一に對する白二の應手は(い)なる小目に來るが普通で、塲合に因つては(ろ)なる三の三を擇ぶの急なる事もある、他の着手はないではないが、餘りに塲合手に過ぎて、定石の部へ加へるは難である。

高目は目外と同じく其根底が小目であると前に申したのは、碁の性質から云へば三の三の利を占めるが普通は最大有利の場所で、其條件を充たすに最も都合良い着手が小目である、それで目外なり大目なりに打つには、第一に敵が小目に來るを期待するので、而して敵に其小目の

打塲を譲つたとして、他の布石との關聯上得失如何を考へんとするのである。

今『他の布石との關聯上』と申したが、已に配石してなくとも、後に其處を占領することを豫定して先づ事を運ぶもある、其塲合を碁では趣向と呼ぶ、三の三の利は大である、れを敵に譲つて、千變萬化究りなき腹や邊で爲すあらんと企てるのである。

隅の方が腹や邊よりも變化が多い筈である、邊端が忽ち味方たり忽ち敵たりするからであるが局面が狹い、腹や邊は隅に比して變化が少ない、反服常なき邊端に接する處が少ないからであるが局面が廣い、夫故千態萬化の統率的の調査が行屆いて居らぬ、他力本願の弱敵を自己自發の技能で凌駕げん爲めには此暗黑界へ誘引したいのである。

三の三の利を捨てゝもと、故意と大目を擇ぶことのある所以は全く

茲に存する、夫れと同時に敵の應手を先つ小目に豫期する所以も知れたであらう。

一

大目
- 項馬
- 項桂馬
- 内外小桂
- アイウ大夾
- エオ
- 小目
- (1) 三ノ三
- (2)

讀者自ら分類の案を立てゝ記入されたし

(1) 小目　第二圖

※印邊に敵が居る時、白二と小目を擇ぶは損で、其說明は(2)三の三の部で申上げる。

白二に對する黑三の應手は、普通(ア)(イ)(ウ)(エ)の四種と、×印の何れにか打つて夾擊手段に出るのとある、此外の手は攻究する價値なきものとして省く。

此隅丈の損得を云へば、(ア)なる內項が最良で、次に(イ)の外項、夫れから(ウ)の小桂馬被せ、最後が(エ)の大桂馬懸けと云ふ順で、×印なる二間や一間の夾は、塲合手であるから得失は其時の模樣次第で決まる。

併し黑一が己に趣向手であれば、此塲の多少の損得を以て、(ア)(イ)(ウ)(エ)(オ)の五種を取捨せんとするは矛盾で、白で

遣る時は、目前の不利あるも、局面が廣くなる見込があるや否やより打算して掛るべきである、黑で遣る時は、矢張目前多少の不利あるも、早く事件が落着して、苦情の問題が起らねば良いと云ふ點から打算して、着手を擇ぶべきである。

今「白で遣る時」「黑で遣る時」と申したが、通例黑は先着の效を保有して居るから、夫れ丈け身上が良い、金持身が大事、千金の子は籠下に座せずてふ格言通り、其身上を維持すれば可い。

白は黑と境遇が違ふ、負債して居る身である、多少の「ネガチーヴ、ウワーク」を厭ふては居られぬ。

然るに黑に負が出た時は黑白共地位を轉倒したのであるから、其折は文字通に解釋しては困る。

(1)の(ア) 内項 第三圖

白四は(い)に綽ねるが普通である、塲合手としては此處を手拔して(ろ)の邊に行くもある、又古碁には※に逆尖したこともある、當節之を學ぶ物好は見當らぬ如だ。

第四圖　第五圖

絶對に不合理の着手を白がして居る、さり乍ら此種の經驗をして後、今日あるを致したのであるから、理屈は骨拔にして、審美の眼で此等の古型を眺めるも一興である。

(1)の(ア)の(い)　第六圖

之れが長い生命を有して居る定石で、大目の内項と云へば、誰しも此型を聯想する程の代表的碁形である。

白六の手は殆んど凡ての場合之に限るのであるが、時とし

てAに打つが適切な事もある。

白Aの時黑Bに約へるが良い處になる、それを見込んでモツと快く云へば、その良い、急な處を作つて、敵をそれに誘つて、Cに拆き度い際には、Aは鳥渡思付の手である、即ち氣の利いた手で、AやCの邊に敵を致させ度くない時の話である。

さり乍ら普通六の手は逸す可らざる良着である事を忘れてはならぬ。

丈和は白六の手を『素人に打たせるは勿體ない』と申したと云ふ事だ、酷いことを云ふたものだ、自體丈和は剛愎な男であつたそうだ、之しきの事は言ひ兼せまいと思はれるがそう云はれても仕方ない事がある。

定石は之れで治りで、之から先、黑七を※に拆き、白八を×に打つ迄が、必しも連續したものでない、其理由は後に叙べるとして、扨てそうなつた時、肉眼に映ずる地歩の廣狹は、黑軍が張つて、白軍が萎んで居る樣であらう。

處が事實は夫れと反對で白の大きい事は思の外である、後になつても黑が容易にBに來れない、來れば白に(に)に綽られて忽ち後手を取る、(それかとて後に至り白が(い)(は)と綽粘は十目の德である)一、三、五、※の四子より成る黑軍の一隊は、二、四、六、×の四子より成る白軍よりも纖弱であるから、外から襲はれると籠城するに兵力を要する、夫故夾擊の手が利く、即ち唯打てる。

然るに此白虎隊は、軍勢は同じく僅少であるが、各万夫不當の要害を約して居るから、黑から近寄れぬ、從つて白から發展せれる。

此黑軍は安値な醤油の樣に伸が利かぬ、此白軍は上等の溜の樣に伸が利く。

第七圖

一、五、三なる黑は整つた形でないから、敵に要擊されると捌き難い、夫故黑を以ては七の邊に拆いて、之と相須つて形を得て居たい。

けれども拆く場所が七で良いやら悪いやら、それが問題になる、單に形を得る爲めに拆いたのでは働がない、一方利では喰足らぬと云ふのが碁家氣質である、殊に白であれば尙更である、白の八の手がない以上は、場合次第で尙廣く啓いても差支ない、又白をして八に打たしたくない時か、或は左上邊の敵手の模樣に依つては、尙狹く啓いて居るもある。

是等の考から、其何れに下すべきか思案に餘る時は、尙一層適切な場合を得る迄、七の手を見合はせるもある。

白八は兩睨で、右隅へ向けて發展するには之がなくては低くなる恐れがある、先づ八に據りて其發展の楷梯を作るので、夫れと同時に七の拆の效力を殺ぐのである。

若し七の拆が狹ければ八と打つには及ばない。

七に對し八と應すべしとも限らぬ、(古碁には⊠に打つてあ

る)手拔するもある。

第八圖　第九圖

白八を手拔した時の例であるが、黑は七の手を略して直ちに九に來るもある、併し何れか一方に味方の同勢がない時は、無理になる。

之れを術語で剩ると云ふ。

剩る　黑十一云々は第八圖に於ける話なり　錢にならぬ　さは其甲斐なしの義

黑十一を又に打つも亦無理である、夫を次圖で紹介致そう。

第十圖

斯く成つて、黑が白を鋤せて塗つたものゝ、其荒壁は龜裂が出るから錢にならぬ。

白六を七に切るは虫が良過て、嵌り手になる、其時黑に又に突込まれると、白軍は全滅する。

『然らば何も白二を態々駄目詰に行かないで、其手で直ぐ四

に出て、七に切つたら甚麼か』と云ふ高說も出やう、此質問を發する人は本初段に先づ六子見當で、通稱初段に三子の格であらう。

「母の十八年」とは「はゝア成程」の語呂

果して爾來らば、黑は何等顧慮する所なく棒に二に粘ぐは必定で、其時白は仍且六と切る外はない、其から先は如何、實地に布石して盤を眺めたら、著者の說明を待つ迄もなく、所謂母の十八年回忌に御經の聲を聞くよりも難有く感ぜられて、本圖の二が手順であることが知れやう。

兎角初心は厭氣の來た女と離れる樣に切り度がる癖がある、達人は滿を持して放たず主義だから凄味がある、敵に粘がせたがる。

自轉車で市中乘廻る名人は向に避させる、先づ自ら避んとはせない、野球の第一疊の撰手は投手に旨く投げさせる、觀相家の秘訣は亡者に當てさせるにある、自ら言當んとするのでない。

宇宙の原理は茲にある、易は宇宙の原理を歌つたものだ「蛟龍悔あり」とは

旨く言廻はしたものだ、登り詰めたら下る外はない、生者は必滅、會者定離、如何に曲乘の名人でも、除けて許り居れば何時かは失策ることもあらう、球を受ける達人が受損なきを保するには、投げ手に旨く投げさせねば危ない、名ある觀相家は自ら求めて言當んとはせぬ、名ある藝人は喝采を避けんとする、夫故趣味が殘る。

宇宙の原理は棊界をも貫いて居る、圍碁の原理は此埒を脱することはない。

切る順を工夫する裡は碁が若い、粘がせる順を考へるに至つて始めて澁味が出る。

とは云ふものゝ不動尊の劍と同じで、事理を犯す者を見遁す譯には行かぬ、徒らに宋襄の仁を學べとは申さぬ。

第十一圖

當今白六を斯樣な處へ打つ風流人はあるまいが、惡手の咎め方に就いての手順を參考までに掲げ置く。

六の手を働のない事に變化させる趣向から案出したもので、今六が星か星下か又は他の方面に行つて居れば割合が取れて居るのに妙な所に瘤が作られて不樣なものだ、貰手がないのも無理はない。

儘になるなら妾の出臍取つて付けたい主の鼻

(1)の(ア)の(ろ)　第十二圖

白四は打初に起ることは決してない、無論塲合手である、それから四の位置は此處とは決らぬ、此邊と見て其處等に來る時を(ろ)の部とする。

現今では四の手が如何に場合手と云へ、餘り近く×印の邊までは進まぬ。

白四に對し黑五の應手や如何、其答が次圖となる。

(1)の(ア)の(ろ)の甲　第十三圖

一匙でも碁の味を嘗めた者は此型は承知である、此種の一手のみでは碁の眞相を探るに餘りに用意不足である、(乙)の部も併せ考へねばならぬ事を申上て置いて、今は七の手の説明に取掛ると致そう。

七の手を(い)に下る方が得でもあり、又白に利も良いのに、何故斯く控目な着手をするかと云へば、白四が在るから、で、左樣すれば成程一方には利するが、一方に失するから、で、後に白が四から大々桂馬に(ろ)に走る手を嫌らつての事だ。

夫れが忌さに斯く七に我慢するのである、然るに白の四がないのに、七と掛粘は親の葬式に燒香の順を他に讓る

に等しい。

本圖の場合に斯く治つて黑は惡い事はない、蛇に卷かれた雉の樣に、一時を忍ぶのである、二、六、八より成る白軍は纖弱なもので、黑は星下邊から要擊して他の方面に餘利を産むことが出來る。

第十四圖

五の手の變化である、此種の打方は數多いけれども、仍且五を六の處へ箭たるの確なるに優した事はない。

第十五圖

昔は恁んな事もしたものだ、之よりも黑は第十三圖の型を辿つて居れば、白四の手をして懸軍萬里の嘆あらしむるのである。

(1)の(ア)の(ろ)の乙　第十六圖

御待兼の乙の場合で、黒**七**は必しも判木摺の着手をのみ擇ぶべきでない、敵軍の形勢を相て此擧に出ることもある。此手段を採るのは、第十三圖の如く白に**八**の處を占領されては面白くない時抔である、之れ以上の「ヒント」は告げるに及ぶまい、鑿と云へば槌と應へる賢明の讀者を對手にして居る事だから。

(1)の(イ) 外頂　第十七圖

黒**三**と外項に來る時、白**四**以下は(い)(ろ)(は)の順を辿るが普通で、其順を外づして他の着手を擇んだ者が損だと云ふ事

になつて居る。

夫故白**四**は(ア)に行くも、(イ)に尖むも、(ロ)に頂けるも、皆損と云ふ說に一致して居る。

白(い)と綽ねた時黒**五**を(は)に引けば、今度は黒の割損となる、第十八圖は其說明である。

第十八圖

白**十二**は手筋で(い)には行けない、行けば黒に(ろ)と封せられ、(は)の駄目を詰めれば後手になる。(だから出切が出來ぬ)

黒**十三**は之れ亦手筋で、敵が堅いから吾も亦堅く斯く應じたは旨い、併し此處丈の損得を云へば、黒が割を喰つて居る、其因をなしたは**五**の手である。

第十九圖

現代までの攻究では、此手順で此型になるが普通となつて

居るが、扨て此處で黑七は何れに打つべき乎。

普通は(い)に切る、若し白六を征に取り得て、且つ外塗するが場合を得る時は、(ろ)から切るもある。

(は)に曲がるは宜敷ない。

さすれば外頂の代表定石は第廿第廿一の二圖である、即ち內切外切の二つに分れる、而して手順も之に限られて居る、他の航路を取ると逆風を受ける、第廿二圖は其例證である。

第廿二圖黑十三は七の處

菅原寺子屋一體容は大きうても未だ頑是がございませぬ」の反語なるべし

(1)の(イ)の(い)　外切　第廿三圖

白が黑七を四ツ目に打拔く順になつたは、惡者の臺白でないが「全然惡くもあんめいよ」である。

肉眼で見た處では、體容は小さいが頑是がある。(第二卷第三十四頁參照)

茲で黑一が星にあつて欲しい、僅か一間の弛が種々の問題

を惹起させる。

昔の書を見ると、此定石は黑十一で完結でない、白十二を(い)に赶すが逸す可らざる所と認められ、而して黑十三も夫を手拔すれば、白に(ろ)に被されるを厭ふて、(ろ)又は(は)に應ずると云ふのが附隨してあつた。

白(い)の赶、黑(ろ)の尖は現今も見捨てゝはならぬ好着點である、併し此定石は黑十三を(ろ)に尖む迄を以て完結とするに及ばぬ。

併し場合によりては白十二を(に)に打つて、後手を取つて居ても後れぬ事もある。

○白(い)の「二つの野心」!!!

白(い)に赶上たは、手拔すれば黑に⊠印に懸けられて低くなるから、夫を嫌ふと同時に、(ろ)に懸けて中腹に爲す所あ

らんとする準備であるが、野心の一つである。

モ一つの野心は何か？

第廿四圖

黑が二に下がつたり、六の劫を恐れると、此の如く荒される。

此隱謀の準備行動は前圖(い)の迂上にある。之れなくては出來ぬ話である。

けれども本圖は黑が虫が良過ぐると、恁んな目に逢ふと云ふ說明をなした丈けで、劫爭をするか、渡らせて居れば文句は付かぬ、其何れが可い乎は碁次第であるが、普通渡らせないで、劫にして黑は他に二着を利せんとする、碁の打始に方つては其方が遙かに利德である、夫故白は早く此事件を仕掛けるは損である。

碁が上達すると此手を含んで仕掛けない、徐ろに星下邊に

陣取つて黑に手を引かせる、而して二に綽ねる所以を作る、黑若し二に下つて赤慾の深い臂堪をすれば、星下から拆いて其利を殺ぐ。

(1)の(イ)の(ろ)　内切　第廿五圖

黑七と切るは、白六が征に取れる時でなくば遣れない。

内切の定石は之れで完結である、古碁では白十二を(い)に打たせて後手を取らしてある、左上邊に黑模樣があれば後手でも道理ある着手であるが、夫迄を定石とするに及ぶまい、白六の征的は何時かは出來るから隙を得次第黑は(に)に打拔いて居ねはならぬ。

併し黑(に)に打拔く場合を得たなら、先づ(は)に尖んで、白に☒印に應ぜしめてからにするが手順である。

行掛の駄賃

之れは所謂**行掛の駄賃**で、黒が白六を(に)に取る手數を要するならば、白は黒の(は)に應じて☒に打つは見易い論である。黒が(に)に打つてから後に、(は)に行くも白が挨拶するか、せぬか夫は疑問になる。

白六が取切られぬ内は、隅の白軍は**存在の必要**があるからである。存在の必要を敵の身になつて考へるは、徒爾の事でない、其一例として第廿六圖を提供する、圖中十六、十四の二目は惜くはないが、黒十七以下を未だ漂浪の身であらしむる爲めには、存在の必要がある、之を黒が見込んで、二七は先手の締が利くと打算するのである。

(ウ) 小桂馬　第廿七圖

黒三の小桂馬懸は外勢を張らんと欲するのである、乃で白四の應手は(い)に頂けるを最も普通とする、(ろ)に行くは常は損である。

白十二を十四に直粘すなるは征の惡なき時なるは勿論なり

されば大目の小桂馬掛けは、白四を(い)に頂けた場合をのみ攻究すれば可い、それに取かゝる前に(ろ)に行くは常は損なる事の證明を致そう。

(1)の(ウ)の(ろ)　第廿八圖

(1)の(ウ)の(ろ)の場合に、白十二を☒印に打つて成功するものならば、**常は損**とは申さぬ、夫が不成功に終るから白は八と切つても駄目となる。

白十二は黒に十三と一本伸を儲けられるを嫌つて、直ぐに十四に粘ぐ樣になつたは、此定石が生れてから後の改良である、改良しても礎が惡いから、夫れ位の修繕では間に合はぬ。（征惡しき時は圖の如くせざる可らず、其征が何處にあるかは第四十二圖と合はせ考ふべし。）

此定石は今は賣手なし　養子全の樣なるは有樣なる印に綽れ　※印に綽れる能はざる生意地なしなるが故なり

又白十六を※印に綽ねられるなら、モ一度見直して使つて貰ふ樣、口利く媒介者も出やうが、十五と頭叩かれて十六に凹んで居ねばならぬ代物では話にならぬ、次の二圖は其說明である。

第廿九圖　第卅圖

第廿九圖は白十二を肩粘せねばならぬ說明で、第卅圖は十六を斯く一と綽ねられぬ說明である、之を俗に尻拔四丁と申す。

第卅一圖

前圖の次第で白は黑五を抱へるは不利と知れたので、恁んな定石が產み出た。

けれども仍且位低く割損である。

然んなら直ぐ切違つたら如何？

目方が減する所より *He sells his chickens in a rainy day* なる損する意義に用ゆ

自第卅二圖至第卅四圖

何れになるも白は雨天に鷄を賣る樣なものである。

さらば白四を(い)に頂ける場合を攻究致そう。

(1)の(ウ)の(い)　第三十五圖

白四に對して黑五の應手は甲乙丙の三種ある。

甲と乙とは外勢を張らんとの主旨を貫かんとするもの、丙は殊更場合の見計を要するものである。

(1)の(ウ)の(い)の甲　第三十六圖

玆で又黑七は手を拔くか、A又は⊠に粘ぐか、Bに下るの三つに岐れる。

Aに粘げば、白八は手拔が當世で、昔は(ア)に頂けるか、(イ)に斜走つたものである。

Bに下れば手拔は出來ぬ、(イ)に斜走るが普通の着手で、其等の要ある次第は、漸次頁を進める間に判明する。

(1)の(ウ)の(い)の甲のA　第三十七圖

今八と頂けて此結果となつた時、舊來は黑が☒に掛粘て吳れたから、權衡が取れて居たけれども、第一卷百十六頁第百四十一圖で委敷申述べた如く、※を切られたとて黑は痛痒を感じないと知れてからは、☒の繼を畧して、其一着を他で有益に使はれるとなつては、白が割が惡いと云ふ意見が一致した。

此事に氣が付いてから溯つて考ふれば、其因をなしたは八であると知れた、夫故此手を省畧して他へ向けるが優となつた。

白が此處を手拔したら怎うなるか。

圖の右上隅を眺めると夫れが解かる、黑が一と襲へば、白は濟まして二と應へて「存在の必要」主義を守れば足りる。

隅で活きて小成に安んずると云ふのでない、早い內に打込んで敵の陣地を荒らして置かうと云ふ考からである、夫故罷り違へば差上げてもよいと云ふ意氣込がある、其處に碁の活氣が含まれてある、表面に現はれた丈では夫れが見へないが、敵が時機を失した時に取掛けに來ると、手を拔くかも知れぬ、だから黑も夫を察して、折良い時に一の斜走を先手に利かす考がなくてはならぬ、其掛引が活動である。

黑十三は◎印邊に拆く方が☒に粘ぐよりも氣が利いて居る。

活働は寫眞の事かと下女等れ

(1)の(ウ)の(い)の甲のB　第卅八圖

黑七の變化で、即ち甲のBの部を申上げる。

黒九とある時、白(い)の切を敢て切を防ぎ、黒(は)ばよりつて韓れて却つて頁形を得、著者此説明を略したる所以や如何。

白八と斜走つた時、黒九と打つのは(い)の切を防ぎ、兼ねて(ろ)に頂けて敵勢を防禦めんとの豫定準備である、且つは中腹への勢力を加へる事として、八方睨の良手と今猶歡迎されつゝある良手であるが、之を省略したら奈麼なる乎。

第三十九圖

前圖黒七は實は(い)に粘ぐが確な處であるのに、七と下つて白が八と應じたにも拘らず、九の粘を略したから、白は承知がならぬと本圖の如く一と切つたのである。

其結果斯くなるが通形なりと普通の碁書に載せてある、之れでは碁打が御客に御稽古申上げる時の流義になつて、活きた碁の講義にならぬ。

明治四十二年頃から碁書も改竄して……

第四十圖……

征的

の事を説き出した、即ち白五を後生大事と六に粘いでは居ぬ、斯く曲つて遮二無二黒の二目を取りに來る事なきにしもあらずとの解釋を加へて來た。

が、未だ坊門や方圓社で内弟子を仕入れる樣な碁意味の話を語つたものが出ては居ぬ。

實際は白に三と行びられてからは、黒が四と突張つても稍時、後れの感がある、夫故其前に黒二の手で四に突衝つて、白を六に應ぜしめて後、二に行くが手順であるが、古人が二を先にしたのは、征ノ的を見て居た一事に氣が付かねばならぬ。

單に征的と申したとて判斷が付くまいから、圖を更へて高覽に供すれば……

第四十一圖……

の次第で白七と約へた時、黑が八と切つた、夫れを白が九と掛けて征に取れる時は、白五の曲は當然の事で、黑二の着手は愚の極である。

然るに黑八に征的があれば、白九は☒に行びる外ない、其結果は奈麼なる乎。

第四十二圖

白は手足らずで御陀佛となる。

そんなら白七と約へたからだと、八なり十六なりに扣へて一手弛めると、黑に十と切られて、今度は中の白が御他界となる。

白も幽明處を異にしては仕樣がない、畢竟するに白五の曲が無理で、黑二の着手は當を得て居る。

活物の研究は茲が大切な處である。

第四十三圖

(1)の(ウ)の(い)の乙

黑五の變化で、此定石の生れたは餘り古くはない、之に就ての得失論は、或は黑損なりと呼び、或は白面白からずと叫んで、異口同說でないが、元來黑一が趣向手であるから、眼前の計算を以てのみ律すべきでない、要は運用如何にある。

第四十四圖

(1)の(ウ)の(い)の丙

之又黑五の變化で、斯く綽出すは他の關係ない時は無理である、左邊星下※印邊に味方の兵が居れば、此綽出が必要欠く可らざるものとなる。

之れが白二を三の三に擇ぶの必要を呼ぶ所以となる。

之れから先、種々の古型が出來て居る。

自第四十五圖至第四十八圖

綽込の例題は何れの古碁本にも澤山陳列してある、御望次

第幾多でも仕入れらるから、此四つで御免を蒙つて、殘は讀者自ら漁る餘地を存して置く。

茲に鳥渡注意の要あるは第四十五圖で、白十八の曲が稍早過ぎる一事で、其時黑十九を先づ(い)に打ち、白若し十九に來らば(之は無理である)(は)に曲がり、(に)に突込んだら(ろ)に副ふて黑勝と云ふ有名な隅曲の一手を記憶されたい。

白十八と曲がるよりも、第四十六圖の二四の如うに凄味を有つた着手が望ましい

(エ) 大桂馬　第四十九圖

黑三の大桂馬懸けは大概の場合は良着でない、從つて其結

果は黑が良くないのは當然である。

白四は普通(い)と(ろ)と手拔の三種ある。

(1)の(エ)の(い)　第五十圖

黑三は白四と頂けた時、十二から約へないで五と綽出すを豫期するが多い。

扨て斯くなつてから、白十四を小桂馬懸の時の常道を履んで、默つて(ろ)に行びて、黑をして(は)に引かせると、三が小桂馬にある時よりも都合良い處に居るので、二、六、八、十、の白が活きるに稍究屈である。

黑三を案出したのは、夫れを冀望しての事であらう。

乃で夫れを慮つて、昔は十を(い)に掛粘で、逸出に便なる樣に考へた事もあつた、併し夫れは黑から(に)に先手綽を利かされて、損と氣が付いてからは仍且直粘に復舊した、而して

白十四を(は)に綽出して三の大桂馬の惡手なるを咎める考案が發見された。

(は)の綽出は小桂馬の時は面白くない。

第五十一圖

白二十二と伸びれば隅の黑に利いて居るから、黑は已むを得ず二十三と活きたのである。

之れで黑は割良くはないが、白は之で忙然はせれぬ事がある、注意をせぬと嵌り手を打出す恐れがある、二六以下の白は調子に乘つて浮かれ出ないで、若し之れが黑の時なら尙更の事(い)に切つて活きて居る拍子を作る考が肝要である。

(1)の(エ)の(ろ)　第五十二圖

白四の變化で、黑三が⊠印にあつて欲しい樣な氣がするではない乎、白幾分の優勢なるは申す迄もない。

(1)の(エ)の手拔　第五十三圖

白四を手拔したとて、一手で往生は遂げぬ、殊に黑三の手が緩めて居るから、斯く易々と活きる、之れも手拔の場合の一例に過ぎぬ。

オ　夾　第五十四圖

白二に對し黑三と夾むのは碁の最初に打てない、けれども場合次第で他の着手を擇ぶよりも、此手を用ゆるの優れることがないでもない。

(ウ)の(い)の丙の場合を夢想して、白が(い)に來た時、綽出して戰

の丙とは第四十四圖の場合なり

つて例の定石の型を行くとなると、黑三は(ろ)にあるよりも都合良い事になる、白は此の處鳥渡一考を要する。

其說明が次圖になる。

第五十五圖

黑十三は通例十四に行ひるのに、斯く激しく綽ねて攻合を急にする、白は直ぐに二十二と切つてて黑十三を取込んで居ては、四、十二の味方を失つた上、三と急處を衝かれて居る態になるから面白くない、夫故劫仕掛で凌を打つた、其結果黑に塗られた。

白は正味十五目であるが、塗つた黑は一目に就き二目以上の效力があるから、夫れ以上の勢力を扶植した勘定になる。

白は 例 通型に囚はれた罪 に問はれたのである、是れだから言はぬ事じやない 囚はれてはならぬ と。

敵が惡手を下だせば夫を咎める妙手がある筈だ、之を逆に申せば其妙手があるから惡手と云ふのである、其惡手を對手が敢行した時、良案が浮ばぬならば手拔するも可なる場合がある、手拔すると其處へ尙一着加へられて、其惡手が良着に化する例がないでもないが、打損するよりは優るのが多い。

白は圖の如く四に頂けたいが、頂くれば此んな目に逢ふからと云ふので、次圖の四の手が考案された。

第五十六圖

白が四と黑五と交換して置いて、六と頂けた、茲で黑は(い)に綽出すも前圖の十三の手が役に立たぬから、己むを得ず(ろ)に約へる外はない、すると次圖が出來上る。

第五十七圖

白は確に打つには尙(い)に綽粘して、いろはの順を經、黑手拔すれば(に)を切らんとする策に出るが、普通になつて居る。

之で「白吉黑好まず」と云ふ講評が付いて居る事は、諸君先頃

御承知であらうが、さればとて之で白を以て滿足が出來やう乎。

是程工合良い封鎖が出來るなら、黑三は打始に着手して構なしである、黑一の本意を遂げたのであるから。

『そんなら、白四を十に打つたら如何』抔と盲滅法の案が提出されやうが、黑が當方の注文通りに五に來ないで、四と被ぶせる、すると(ウ)の(ろ)の塲合と同一になるから、問題にならぬ。

果して然らば黑三に對する白の良着妙手は何れに潜んで居る乎。

第五十八圖

黑一は前にも申した如く、征に多大の關係を有する手である、黑九と約へた時、白は心氣一轉して十と伸びる一手は

此邊の記事亦脫俗の感あり

脫俗の着眼ではあるまい乎。

併し黑一を征に取り得る時でなくば、狗に類する虎を描くに等しい、此一事は忘れてはならぬ。

夫は扨て擱き、白十が何故脫俗の着眼と迄賛辭を得たか。

第五十九圖

白が十と行びてからは、黑は白に八を粘がれると脈が上がる、因て十一と抱へる外はない、乃て白十二に打てば黑は十三に打つが至當で、第六十圖の如く綽上げれば却つて惡い。

白十の手は黑一が外勢を張らんと企つるを打敗るには最も適切な着手である。

此考を敷桁すれば、第五十五圖の黑十三迄打來つても、未だ敵の封鎖を脫する餘地がある即ち十四で二十九に伸びを

先祖の助六に對して申際なし

打つのである。

第六十一圖

夾は碁の始に打出す事は稀と申した、況して一間夾と來ては尚更である、之は附近に己が味方が強力な勢力を有つて居る時、無事に白を治まらしては祖先の名に對しても相濟まぬと、強襲に出たのである。

白四は窗明きだからと(い)に尖出れば、愈究境に陷る恐がある、此時此際五十八圖の式に則る事が出來れば、萬事に都合が良い。

黑に征の的かあるなら、白は隅で活路を見出すも亦一策である。

(2) 三ノ三　第六十二圖

白二と三の三に打込むは、黑が※印邊に陣取れる一、其効力を殺がんとするのである。

若し白二を(い)に小目に打てば、黑の打手は通例二つある、二に頂けるか、(ろ)に小桂馬するかである。

二に頂けるとせん乎、御定りの順になつて黑が廣く※印に拆いた、然るに夫れを白は手拔したと同一の結果になり、茲て黑は先着を以て其廣地を固める順を得る。

(ろ)に斜走するとせん乎、白(は)に頂ければ例の綽出を喰ふ、すると丁度※にある黑が待駒同樣になつて、崇をすること夥しい、假りに四十五圖以下四十八圖の碁譜を盤上に配べて※の附近に黑石あるものとて考へたら、委曲を述立てずと

も大様が知れやう。

それで星下邊に黑石ある時は(い)に行くが愚であることは知れたが、未だ三の三へ打つのが、何故※邊の黑石に對する妙着であるかと云ふ證明が立つて居ない。

乃で其說明が次圖となるのである。

第六十三圖

白一と打込んだ時、黑二と尖頂けて白を三と竝らしめることが至つて不利であることが解れば、其說明が出來る。

白一、三と竝んだ此棒は、紀州の內割と云ふ棒の如うに、槍の柄にすれば千段卷が取れたとて棒は折れない、其側へは寄附けない程、鋭い鋒先である、白にそれ丈の勢力を左下隅から右方へ向つて加へさせた黑は、其報酬として星下から尖までの間を强固にするを得たかと云ふに、却つて薄弱極る

陣容となつたのである、世の中に之れ程引合はぬ話はない、提灯屋の小僧のみが骨打て叱れるのではない。

之を碁客　流の說明法で遣ると、白が始め三と小目に打込んだのに對して、黑は一と頂けて二と引くべきを、二と御遠慮申上げて、敵に三の三の要處を讓つたと同一の結果である、二の尖頂の惡手なるは申す迄もない。

然らば二を何れに應したら可い乎。

第六十四圖

白一はAかBかに黑がある時でなくば打たぬ手であることを第一に承認せねばならぬ。

乃で之に對する黑二は、(に)に尖頂けるは絕對にない手ではないが、前申した次第故特殊の場合でなくば打てぬのである。普通は(い)で、時には(ろ)にも打つ、(は)は極めて稀で、且つ損な

着手である、夫等の理由は頁の數が增すに連れて漸次知れて來る。

第圖　第圖　第圖　第圖　第圖

甲乙丙　第圖　甲乙丙　第圖

小桂馬　第ア圖　第イ圖　第ウ圖

尖頂　尖頂

讀者は圖解と見合して表中へ自ら圖の番號を記入されよ

第ろ圖　第は圖　第に圖

第い圖

三ノ三

（い）小桂馬　第六十五圖

黑二と斜走した時、高目と白一と黑二とで成る布石を熟視すれば、右上隅に掲げたる高目の小桂馬懸けよりも三石悉く一間低い處にあるが知れる、之を又手割から考へれば、最初黑二と目外にある處へ、白は⊠に打つべきを、一間深く打込んで、斜走に懸けられたと同じで、若し之れが一間高くば、※印に頂け得られるべきを低い爲めに他の着手を擇ばねばならぬ仕誼となつて居る。

之れ丈の苦痛を白に與へる事の出來たのは、星下Aか又は星角Bの邊に援兵がある餘勢である。

夫れ丈の苦痛を忍んでも星下邊の敵兵の威力を殺ぐには、白の一が好着點であることは結果を見て知れる。

茲で白三は（ア）（イ）（ウ）の三種ある。

(い)の(ア)　第六十六圖

黑**四**は星下邊の味方の勢力を利用して深底まで敵を追窮せんとするのである、乃で又白**五**の應手が甲乙丙の三種に分れる。

(い)の(ア)の甲　第六十七圖

白**五**を前圖の甲に擲てば圖の如くなる、此處で黑に先手を取られては白は辛らい。

白は辛らいけれども此定跡を擇んで差支ない時もある、若し黑がBにある時は高目と相須つて、白が△に來た時、※印に約へて出路を喰止めるに好都合の塲所にある、夫故白は△印に發展して活路を見出さんとするは拙の最ものである、だから斯く踏んだり蹴たりされても、維れ命是に從つて隅で存在の必要主義を執る、平たく云へば命有つての物種

と我慢をするのである。

斯くて此結果は白は一方に敵を利せしめたが、**三**と飛んで星角邊の敵勢を不働のものにした。

然らば黑軍がBにあらず、Aの邊に屯して居たら白は何んとする。

(い)の(ア)の乙　第六十八圖

(い)の(ア)の丙　第六十九圖

乙は常用手段であるけれども、丙は稀に行はれる、斯く**五**と引くは後に△印に頂越を含むのである、又黑が△に打てば今度は却つて白の※に黑から頂越を狙ふのである、其時白は罷違へば**一**、**五**の二子を捨てゝも、先へ先へと打越さんとする覺悟である。

(い)の(イ)　第七十圖

白**三**を第六十五圖の(イ)に打てば、黑**四**と綽ねるは當然ある、乃で白**五**は甲乙丙の三種に岐れる。

(い)の(イ)の甲　第七十一圖

白**七**は默つて綽ねて、黑に**八**と粘がせて**九**と行びた。黑も**八**の時☒へ切を入れぬのは、後に**十**に頂ける野心があるからで、斯くて**十二**の時直ぐに**十四**に引けば、白は先手で他へ轉じ、黑**十二**に置く時又先手を取つて、後の味を殘す考に出るかも知れぬ、今なら己むなく挨拶するに相違ない、それで**十四**と引いて先手を取つたのである。

此定石は古から流行して居る、明治になつて今の本因坊は野澤碁伯との爭碁に(**八**)と切つて打拔く順を得た樣に覺へて居る、必しも此定石に依るべしと限らない、場合次第で夫

々着手の變更を試みる要がある。

(い)の(イ)の乙　第七十二圖

黑が星脇にあれば黑**十**は却つて氣が利いて間が拔けて居る。

白**九**は黑が廣く星下にあれは、隅を見切つて**四**を抱へて振替るもある、

(い)の(イ)の丙　第七十三圖

白**七**の時黑**九**と約へれば、甲と同じになる、之は白を逐出たしい時か、黑が圍んでも樂がない時の打方である。

(い)の(ウ)　第七十四圖

黑が附近に優勢な兵力があれば尋常では濟まされぬ、毎々白い齒のみ見せては居れない、斯くなる事が忌なら、**三**の手

白齒を見せるは笑顏の時なり

の時白は手順の一考を要するのである。

（ろ）第七十五圖

局面の模樣次第で黑二と尖むの佳なることもある、本圖以外色々の打方がある、今は畧す。

（は）第七十六圖

黑二と頂けるは多くは好まぬ、一見して黑が良い樣で其實惡るい。

白一を始めに三に打つは良くないけれども、黑が二と頂けると、一と蟹の如うに夾んで、仍且此定跡になる。

此故に黑二と頂けるは好まず

此外黑如何樣に變化するも利がない。

（に）第七十七圖

黑二は常は損であるけれども、斯く打つの己むを得ざることもある、白五は手筋で※へ飛べば劫があり、☒へ赶せば黑を厚くする、斯く輕く打つべきである。

第七十八圖

（に）は尖の塲合であるが、同し方面から白を壓するに黑二は尖のみと限らぬ、斯く斜走に打つもある併し白に一と三の三に打たれてからは黑は此方面から白を防ぐは方向違で多少の不利は免れぬ。

高目と白一との位置を、沈默して見詰め乍ら考へると、自ら其理が知れて來やう。

白一を三の三に打つは此方面より黑防いて利なきが故なり

一間高懸り
- (ア) 頂下
  - いろは
- (イ) 頂上
  - 覗頂夾
    - いろは
    - 甲乙丙
    - A B
    - アイウ
    - いろは
- (ウ) 夾
- (エ) 斜走

讀者自ら圖解の番號を記入せられたし

高目(小目懸り)手拔

小目へ一間の高懸りは、丁度高目へ小目に打込んだを手拔したと同一に見ることが出來る、第二卷(三)一間高懸りを大目の手拔の部に編入した所以である。

(三) 一間高掛

一間の高掛りは其處丈けの計算から云へば、三の三の要點に及ぼす威力が鈍い、夫れ丈け小桂馬掛りより損である、併し趣向で此着手を擇ぶ場合もあり、又布石上から之に限る場合もある。

之に限る場合の一を示せば

第七十九圖

の如き場合に、白十二はいと小桂馬に掛るは愚の極で、丁度陷穽に這入るも同様である、何故かと云へば然る時は黒十一が三間夾と黒九からの拆(ひらき)とを兼ねた誂へ向の好着になり其上黒先手で思ふ壷に入るからである。

と云ふて此處を打たないで(ろ)の邊に締れば、黒は得たり賢しと、(は)に打つて完全なる陣容を形作る、されば白十二で(ろ)の邊を守るのは、落付過ぎて間が抜ける。

乃で(は)に一間高掛りを擇んで、黒をして(に)に應ぜしめ、而して此處を輕く捌いて先手を取つて(ろ)の邊に締るか、又は直に(ろ)の邊に締つて、(は)の石を輕く捌く處で、碁に仕やうと云ふのが近頃の布石の考案となつて居る。

併し讀者の内には白(は)の時、黒(に)に應するや否や疑問であると主張する向もあらうが、之れは當分改正されぬ緊

第一卷二十頁の參照

要な着手で、他に之に優る地點が發見さぬのである。

黒若し此處を手拔して他に轉せば、白は直ちに(に)の地歩を占領して五の黒を壓迫する、三手拔にするは割合損である處から、黒は之に應戰して活を求めるとすれば、何れの方策に出るとも此邊に頑丈な白壁を作らせる事になる、さすれば九と十一の間に打込を生ずる乃で碁の精神に戻る守りの手を要する、それでは最初に此處を見捨てゝ手拔した所以がなくなる。

黒若し(に)以外に此處に着手するには、(い)が普通であるが、之れも白を丈夫にするから黒十一が懸軍萬里の有樣となる。

其他黒の着手も色々あらうが、黒として確實に先着の效力を保有し行くには、(に)に取り。五と十一と相呼應して(は)

の白を攻めて居るに限る、白が身を以て免かれんとすれば、黑九と十一の間は自ら固まり、左側も亦自ら黑軍の發展に便ずる事となる、言を換へて云へば黑は(に)に陣を構へて白軍の脫走を待て、一着で攻守兩樣に利く完全なる兩口手を得んと待受けるのである。

第八十圖

白一に對し黑二の應手は普通(ア)(イ)(ウ)(エ)の四種で、手拔すれば高目(大目)の場合と同一となる。

(ア) 下頂

第八十一圖

黑二に對し白は三と約へ、黑四と引く外はない、乃で白五は普通が(い)で、趣向や間合の關係で(ろ)に掛粘ぐもある、而して

稀には手拔するもある。

(ア)の(い) 第八十二圖

之は(い)の場合である、其割合は此處丈けの計算では白が稍不足であるから、白は好んで之を用ゆべきでない、他の關係上此定石を擇むのが却つて趣ある場合に限ると覺へて居けばよい。

黑六は手拔もあるが、他に急を要せぬ限りは逸してはならぬ着手である、之に對し白が備へずは直ちに七を占領して白を要擊せるとするのである、白も五と直粘して、碁家の忌むなる馬鞍形を作つたのは、黑を六に應せしめて、七と後手取るは覺悟の上である、七と後手取る存念でなくは、五と直繼せぬ。

黑七は碁家は之を厚い手と稱へる、之を積極的に見れば(之

馬鞍形や丁字形は碁家の忌むる所なり

厚い手

あるが爲に)左側星下の邊へ發展の準備となり、之を消極的に見れば(之ない時は)第八十三圖の如く白軍猖獗を極むるを妨ぐる爲めとなる。

(ア)の(ろ)　第八十四圖

之れは第八十一圖(ろ)の場合で、白は**九**と一間廣く拆らき度い時に用ゆるのである、此定石は第八十二圖に比して**五**と**六**の交換ある丈け、夫れ丈け白に不利であるから、好んで採用すべきものでない、其不利の埋合が**九**の有り塲合が良いので付く時に限るのである。

今**五**と**六**の交換がある丈け白が損と申したが、夫れば恁う云ふ譯である、本圖から**五**と**六**を取去れば、前々圖との差は唯**九**の在家が一間廣い丈けである、乃で今新たに黑**六**と白**七**の頭へ打つたとして、白は之に對して**五**と應するは愚ではあるまい乎、換言すれは**五**と**六**の不利の交換をした結果になつて居る。

黑**八**は決して逸すべからざる着手で、若し手拔の考があるなら、第八十五圖の如うに**六**の手の時にすれば道理が付く、**十**と切が入れられるからである。

(は)手拔　第八十六圖

之は白**五**の手拔の場合で、黑に※に切られるは大分の苦痛であるが、繩墨に拘泥して居ては、敵を惑ばず動機が得られぬと云ふ考から來るが多い。

黑に※印に切られた上は、白は此邊を輕く捌くが專一で、黑も亦此處を凝り過ぎてはならぬ、其處に碁の骨が存する。

平易にして簡明定石の意味斯くて釋然たるを得

(イ)上項　第八十七圖

黒二と上頂すれば黒四までは當然の着手で、他に之に優る良着は見出せない、乃で白五は(い)に直粘するか、(ろ)に掛粘ぐが普通である、而して稀には(は)に行びるもある。

(イ)の(い)　第八十八圖

黒六は肝要なる着手である、之は丁度第八十二圖を轉倒したと同じである。

白七は直ぐと黒六に挨拶しては居られぬ、若し五が⊠に掛粘いであるなら、※に應して良形を得るから、否應なしに返事して居て差支ない、己に五と直粘する所以のものは、今は其手を略さんと欲するのである、而して後に此處を打つなら、※印にあらで其下の。。印である。

(イ)の(ろ)　第八十九圖

之が並方黒白ない分れで常用の手段である。

白七の時目先の慾に驅られて八に約へるならば、黒に(イ)に打たれ矢張七に戻らねばならぬ、黒に先手で(イ)に一本儲けられ、次に(ロ)に行びられては白は堪らない、黒六に對する白七の粘は動きのない着手である。

白九を十に衝き當る變化は次圖に顯はれる、併し夫れは征的の有無を能く吟味した上でなくば遺れない事で、常は斯く打つて治まるを長策とする。

斯くて白十一は※印に三間に拆くが古習であるが、此定石は黒十を以て一先つ鳧を付けると見るが至當である。

第九十圖

白**廿九**は**三十**に切つて次圖の如く搾り度いは山々であるが**二、四**を征に取れぬ時は仕方がないから斯く打つのである、其結果白は經費不足の堤防を築いた樣な感がある、何れの日か決潰する恐があらう。

第九十一圖

黑征の的なき時**三十二**を**三十三**に伸び出せば白**三十二**に粘ぐ、すると**二、四、三十、三十二**が征に掛る、夫れを補へば**十二、十六**が遣られる、即ち**三十二**の粘が完全なる兩口手になる、夫故黑は仕方なく泣く**三十二**に提つて居ねばならぬ、之れは白の待設けた處で、**三十三**と先手に締め付け、又もや**三十五**と凄味ある先手を打つ、之れも黑は否應なしに**三十六**に抱へて居ねばならぬ、側目をすれば白に**三十六**と行びられて此一團の黑は捕虜となるからである。

第九十一圖は黑手治まりなれば白は今光手なる先手前手を即ち有りて保つる圖は然らず共事那邊の事を思合せて本文を讀まば思ひ半ばに過ぐるものあらんか

斯くして築かれたる白の堅壘は萬貫の砲彈も尙且貫くを許さない而して白の手番である、白は良い株を買つたものではある。

乃で一の斷案が得られた

黑**七**は**二、四**に征の的がある時か、又は斯く塗られても差支ない時に限り下だす手である。

白**九**は**二、四**を征に取り得る場合で、且つ斯く塗るに利ある時に限り行ふ手である。

第九十二圖

之は前圖解の中兩口に掛つては黑面白からずと云ふ說明に外ならぬ。

圖の如くなつて白は噪がす徐々に**四、五**と飛んで**二、四**以下の黑の遊軍を逼ると同時に、何日かは※印に行び、後に☒に

綽ねて劫爭を試んとする含もある。

凡べて斯る劫爭は白は必しも劫に勝たんとするのでない、寧ろ他に二着を得んとの野心を懷いて居る、劫を利用して打越さんと欲するのである。

二十七や**三十七**の如き廢石が利用されて劫味が出來たのは、白には勿怪の幸で、夫れ丈け黑の不利である。

其劫を恐れて黑が此處を補へば他の急處を白に打越される勘定になる、畢竟するに**三二**の出は無理と云ふことに歸着する。

第九十三圖

之ば黑**六**の變化である、當今は使用すること至つて稀で、夫れよりも次圖の如く夾む趣向に出る、夾んでも都合が惡く、と云ふて**七**と覗くも面白くないとすれば、即覗夾頂の三つが場合に適合せぬとならば、最初に**二**と上頂する時に顧慮すべき筈である。

今こそ秋の扇と捨てられた此定石も、昔は鳴らしたもので、今だとて**八**の下がりの優美なる所に微かに殘る當年の面影、姥櫻の眺もあかぬ趣が保たれる。

その生命なる**八**を⊠に引いては湯も茶も煮へて了う。

第九十四圖

今度は夾んた場合である、斯く打出すのは黑**六**が單に**一**、**三**、**五**、以下の白軍を夾擊すると云ふ一方利きの時でなく、右隅に對しても已が味方と何かの關聯を有する時でなくばならぬと云ふ一事を承知して居ねばならぬ。

即ち右隅に黑軍が居て夫れから拆になる時か、又は(い)(ろ)と

尖んだ黑に對し、白(は)の邊にある時の如き場合でなくば黑**六**が適切の着手とはならぬ、然る時は完全なる兩口手になる。

然るに右側に黑が(い)に在るのみで白(は)にある時黑**六**と打てば、白は**十五**を先づ(ろ)印に小桂馬掛けをして順次黑を右邊に匐はせて後※印に帽子を被ぶせるか、又は左側に轉して本圖の筋を辿るか、何れにしても白皚々たる連峰の裡、四面楚歌の聲を聞くに至つては、虞美人を連れて逃げるに困難で、吉野山中に靜と雪中の別をした判官の胸中も思合される、之れが芝居なら春氣色千本櫻の眺望宜しくであるが、脱膚をつんざく寒中を、實地で遣つては黑は堪らない。

白**十五**は黑**二**、**四**を征に取り得るのに此定石の跡を辿る樣では、活動寫眞に雇はれた役者の方が氣が利いて居る、鎧着て自働車に乘つても人は笑はないのだもの、

取るべきを取らざる人は取るべからざるを取るやも計られず

十六から打つて黑を頂載して差支ない

それを遠慮する手合に限つて過物を受取る時の挨拶は「您んなことは今後御廢なさらない方が宜敷い」

面白くないから暇おくれ

此定石に組んで黑が阿婆摺れ女が別れる時の言草の如うに面白くない時は、次圖の如くするも亦一趣向である。

第九十五圖

黑**十**の啓は⊠印に扣へることもある、要は左上隅の配石の模樣次第である。

手拔　第九十六圖

二、**四**、が征に取られぬ時は。黑**六**は手拔するもある、其手で夾んで居るか、他に轉するかである。

二、四、が征に取れないから白は十五から當てるに相違ない、其時黑二、四を愛んで(い)に曲がると白の注文に嵌まる、即ち(ろ)(は)を先手に打たれる。

最早用事は濟んだから二、四は要らない、十六と先手綽をして又他に先鞭を着ければ白が割を喰ふ。

(イ)の(は)　第九拾七圖

白五の行は此一隅に就ては頗る付の損な手であるとは云へ、常套を脱して外勢を張らんと欲する時の手段としては批難をする遑がない。

碁の妙味は此等の手の裡にあることを讀者に告げて置きたい、已に黑が二と上頂するは、十二と下頂するよりも外勢を得んと志す度が高いは申す迄もない、而して黑は白の着手を(イ)の(い)や(ろ)に豫想するが常である、白が(い)や(ろ)の手段を講じても、黑に有利な場合に、白には未だ此(は)の一手がある、此擧に出られて黑に不利な時は、最早黑は二の方面から打つては居られない、夫故(イ)の(は)即本圖五の手は實戰に使用することもあるが多くは此の手があるとことの爲めに、敵が腦めば夫を使用する場合を作らぬが常である、即ち打たずに敵を制することになる。

(イ)の(い)は第八十八圖(ろ)は第八十九圖

(ウ)　夾　第九拾八圖

黑が白一を夾むには特殊の場合の外は、本圖の如く二と打つが通則で、之に對し白三の應手は(い)又は(ろ)が普通で、極めて稀に(は)に付けることもある。

（ウ）の（い）　第九拾九圖

白三と尖んで黑四の桂馬と交換するは幾分白に利あらずではあるけれども損して得取れと云ふ戰略に出んとせば之れ亦無下に排斥すべき定石ではない。

毎々申すこと乍ら、己れ利せんと欲せば、先づ敵を利せしめさる可らずと云ふ事を思はねばならぬ。

人より安く買つて人より高く賣らんと考へては、棒手振や大道商人の心根である、人より高く買ひ、人より安く賣つて、夫れで商買にせんと志す樣にならねば大商人とはなれない、此腹がなければ縱令や物價の暴騰に際して買占で大利を博するとも、一度下落に際會すれば周章てゝ大損をする、昔日の榮華は何處へやら、槿花一朝の夢と化し去るのである、然るに下落と定れば惜氣もなく他より

一段安く在庫品殘らず賣拂らつて、裕然として居れば、其賣上高で己前よりもより多くの品を手にすることが出來る、恁くして商品を新たにしつゝ他日上騰の機運の來るを待てば可なりである、急に無理な利を得んと志すから失敗をする、己れは損をしないで他は決して利せしめぬとの考の存する問は商賣は幼稚である、宇宙の原理は一以て之を貫いて居る。

併し無意味に敵に糧を齎らし、盜に鑰を與へよと云ふのではない、今白三と黑四の交換は、白に利なく黑に得なる分配であると申した、白が其不利を敢てしても差支ない塲合がないでもない。

第百圖……

は即ち其適例である、右側の布石次第で白五、七と約へ付け

て大利ある時は、黑に左隅の利を嘗めさせて差支ない事は間々ある、夫れでは黑が隅の小利に甘んじて居れないとならば、六を⊠印に打つ必要が起きる、白は豫めそれを見込んで、三と尖むのである、其處に碁の興趣が存する。

五、七の約へ付けが左まで大きくない時は、白三の手で第九十八圖(ろ)の着手を擇ぶか、又は他の趣向に出ねばならぬ、五の手で工夫を凝らして良着を此處に見出さんと望むは、袈裟の紋付、乳母の生娘を探がすに等しい、第百一圖は即ち其證明に外ならぬ、百一圖に於て何れ程白が不利であるかと云へば、三が調子外れの位置にあつて、更らに一着の效力を顯はしてない、それ丈け白の損失である、三が⊠印にあれば十露盤が持てるけれども、今此處へ一着を要するとあつては、一着分後れる勘定となる。

(ウ)の(ろ)　第百二圖

白三の變化で、第九十八圖の(ろ)の場合である、其時黑は(ア)に綽ね出すが通則で、稀には(イ)に箚(つきあた)ることもある、(ウ)に來るのは極めて少ない。

(ウ)の(ろ)の(ア)　第百三圖

黑が四と綽出たとすれば黑六迄は當然の成行で乃で白七の打場はAとBである。

此定石は手順が覺へ惡(にく)くて、初段に五子以下の初心には到底間違なく併らべ得るものでない、先づ分類を明かにする爲め、表を暗んじ、圖解の番號を記入し、夫れから利害を知る爲めに評論を讀み、最後に不用な定跡や、詰らぬ石立のものは、其番號の下に朱で横線を入れる。

夫れが終ると同時に苦もなく記憶が出來事理も從つて明白となる、此面倒を煩厭として其勞を惜めは、何時までも面倒な事を繰返しつゝ五里霧中に彷徨ふのである。

近頃碁の雜誌に掲げられたる達人名手の碁の評論は、內弟子仕入れ同樣な教訓を漏してある、有難い世の中とはなつた、夫れが又纏めて一册の書になつたものが多い、之を讀んで合天の行かぬ人は寡ない、了解の行く樣に親切に嚙んで含める樣に書いてあるのだもの。

既にして了解が參つた、成程々々の百萬遍が繰返された、此講義錄卒業生が實戰に望むと更らに其效を表はさない、之を當時流行の誇張文字を使つて言へば、聖代の一大恨事ではあるまい乎。

碁客の講義錄に一點の難なく、寧ろ特筆大書して其勞を

此邊の記事著者の面目躍如として顯はる

多とすべきであつて、之を讀むもの亦當代の天才であるのに、此嘆あるはそも如何なる故だらう乎。

統括的に其記事を讀む法を見出さぬから、概念が得られぬ、夫故如何に俊英の士と雖も記憶に困難で、事柄が解つた如くで更らに要領を得ぬのである。

早い話が地圖を見ないで大都會を引張廻はされたとて眼に諸の事物を見、耳に諸の音響を聞くのみで、更らに其要領を得ない樣なものだ。

事理の判別悉知を得る爲めには、先づ其要領を得ねばならぬ、要領を得るには統括的の頭腦がなければならぬ、而して後細に入り密に亘るのである。

碁客の內弟子となるには、第一に隅の定石の凡てと、古人の打碁を少くも三百余種を暗ぜねばならぬと聞いて、卒

倒する人がない迄も呆氣に取られる向が多からうが、今著者が蚊に腦まされつゝ筆執る家の隣に住む大厦の主人高明加藤男は、一夜に外國の川の名三百を暗記したのである、川の名は文學的に覺へるのだから、記憶術に依るも容易の業でない、碁は科學的に覺へる道がある、打碁は基本の石立數種を精確に呑込めば、他は夫れに照らして記憶を呼出し得るのである。

定石は夫れに較ぶれば餘程易い、表を見ても餘りに複雜でない、支那歴史を學ぶに歴代の名前を連ねて、其間に種々込入つた事の犬牙の樣になつて居るのを、表に作れば之れよりは複雜する。

此複雜な歴史は漢學者流に攻究して居たのでは、周の時代に波斯文明が輸入されて、當時己に玻璃の製造まで承

知して居た事や、侍郎と稱する者の多くが外人であつた事抔は知れまい、現代式に統恬的の頭腦もて分類や系統を明にし始めたので、勞少くして要領を握み易くなつた、本末輕重も明になつた、徒らに傳記に詳らにして歴史の何物たるを知るによしなき昔とは違つて來た。

定跡を學び其眞髄を得ん爲めには、分類を明にするが第一の要義である。

(ウ)の(ろ)の(ア)のA　第百四圖

之は(ア)のAの部であるが扨て、白七を直ちに九に割込むが理あるか、斯く綽ねて白を八と行びさせてからにすべき乎は、讀者が樂して學ぶ癖を除かん爲めBの部を讀了る前には告白せぬが可からう。

其點が最も大切な處で此定石の眼目である。

黑十の打處は之れとは限らぬ、Bの部を見て參考とするが可い、併しAとBとの相違は黑が已に八と行び下つて居る居らぬ別があるから、Bの手順を其儘Aに宛行ると飛んだ間違を惹起す、心せねばならぬ、昔は此處に餘り重きを惜かなかつたが、當時は此處の手順が頗八ケ釜敷い、白十三は黑に十六の一手を儲けさせるを忌んで⊠に打つもある。

白が七と綽ねてからは普通此定石を使ふて居る。

(ウ)の(ろ)の(ア)のB　第百五圖

白七の時割込を先にするがBの部で、茲で黑八の應手が甲乙丙の三つに岐れる。

(ウ)の(ろ)の(ア)のBの甲　第百六圖

此分配となるが當然の結果であらう、併し之では白は不滿に相違あるまいが已むを得ぬ次第である、と云ふ譯は黑の小目に對し白一が不利な位置に在つたからだ。

白が斯く損をしては夫れを埋合す事の出來ぬ場合であつて見れば、最初一間高懸りに打たぬが良い。

併し此損んな定石も好んで採用し得る場合なきにしもあらずである、それは附近の情態に依るのと、一つは他の方面に先鞭を着けたい時である。

之は白が損であるとは笊黨にも知れてあるが、何れ程損かと云へば御素人衆には答辯が付くまい、それなら夫れを計る尺度を御貸申さう。

白九を※に置き換へて黑一目を打拔き、而して黑八を取去つて見る、それが普通互角の分れと認られたる定石で

事實は黑八は先手綽なるも結果よりの見て論なり

ある、然るに本圖では白が※に打つて黑の一目を打拔いて居る可きに九と行ひると云ふ愚手を下した事になつて居る、黑も他の價値ある所へ打てば良いのに、八と綽ぬて後手を取つて居るから、他に先着を加へ得る場所の有無と、其利得の度合の差とを通算せば知れるのである。

（ウ）の（ろ）の（ア）のB の乙　第百七圖

黑八を白七の上から被ぶせた場合で、其時白九を十三に打つもあり、黑十四を十六に粘ぐもある、前者は第百四圖又は百十圖と同一の結果となり、是非の論は立たぬが、後者は本圖が本手である。

黑十四を十六に粘げば白に十五の先手綽一本喰ふを嫌らつての事であるが、赤慾深くて却つて損となる、さすれば又白に※印に先手曲りを利かされるからである。

處が夫れも癖だと、十四を※印に打つて先手下かりを利かせ、白に◦印に打たせて、十六に粘いだら申分はあるまいと云ふ考が起るであらう。

が夫れではとんと碁に風情がない、後に味が殘らない、本圖の黑は其色の柄に似もやらで、雪持つ笹の如くに重さ堪へて暫時を忍ぶ時待顏なるが心にくい。

機熟すれば黑は☒に切るのである、其時白は◦に打つては居れまい、⊕に肩粘するの外はない、夫れから又折があれば※に伸びて白を◦に打たせる、早い話が白に六手費さして一目拔かせんと企つるのである、其味を殘す丈け碁に餘情がある、碁を打つなら斯くありたいものである。

（ウ）の（ろ）の（ア）のB の丙　第百八圖

黑八を下から受けた變化である、黑十を十一に打拔き、白に

仍且第百八圖の説明なり讀者其心して讀め

十の處を讓れば第百十圖となる、黑十二迄は已むを得ぬ次第であるが、白十三の時黑十四と行びれば本圖の結果となる、之れでは割を喰つた勘定で一向に詰らぬ話である。

然らば黑十四の手で十五に曲つたら怎うかと云ふ説が起らう、次圖は其説明であるが夫れは尙惡るい。

白の手順は之に限る、七と打つて敵の應手を試み、夫れから轉じて九と綽ねる抔は澁い、殊に十三の赶を先にし、十五を後にした所に味がある、十五を先にして黑を十六に曲がらせてからは十三の赶は利かない、最早大事去つて事が小さくなつて居る。夫故黑は十四に應じないで、裏手へ廻つて※印の邊を占領する、其れは白の忍ぶ能はざる所と、白が十三の赶を廢めて十七の邊に備ふれば、黑から十三と押され五、一、十一、七が駄目詰となり、塗つた效力は亡せる。

爭碁、劣の分岐點は手順の正鵠を失はざるに存す

白十七は左上隅との關係上※印に四間啓をするも差支ない、場合次第臨機應變である、那邊の消息は碁が活物たる所以である。

第百九圖

之は第百八圖の中白十三の手順を説明する爲めで、其時黑十四と本圖の如く曲つたら如何、夫れが白に不利となれば白十三は十四に約へねばならぬ。

扨て黑廿は脇見する暇はない、※に抱へるの一手である、すると白は二、十六を征に取る、若し征に取れぬとも茲に先着の一手を加へるとなると黑の出來は良好でない、畢竟十四の曲が良くないからだ。

白十三の赶を先にし十四の約を後にした所以は之れで知れやう。

(ウ)の(ろ)の(ア)の*B*の丙　第百十圖

黑の先着がある處へ白が後から來て、而かも**一**と高く懸つて五分に分れた。

それでは黑が物足ならぬ心地がする、けれども後に苦情の文句が起らぬ別で、且つ先手を保有するから、左まで黑を惡様に云へない、殊に此附近の布石の情況に依つては黑頗る働ありとも云へる。

普通は黑緩しとの評は逃れぬ。

(ウ)の(ろ)の(イ)　第百十一圖

黑**四**の手の變化で**五**に綽出さないで、行びて**六**と切る趣向である。

一、**九**の白が征に取れて且つ此邊を塗るに利ある時に限り

此手段に出るのは構ひない。

黑**八**の手順を誤れば次圖の如くなつて黑は目茶苦茶。

第百十二圖

之れは前圖の解と見べきもの、此上書き立てるよりも沈默を守り、讀者自らの啓發に訴へる方が遙かに雄辯に優らう。

(ウ)の(は)　第百十三圖

白**三**を黑**二**の頭に付けた時黑が圖の如く應せば、丁度小桂馬懸りを一間夾にしたと同し結果になる。

委曲は第二卷に盡したが黑白共之れが定石だと思ふて、無

暗に型の如く並べるは愚の極で、斯樣になるが良いやら悪いやら、緻密に塲合を觀察して後趣向すべきである。

（エ）斜走　第百十四圖

黑二と斜走するは多くは己が味方が※印の邊にある時に限られてある、白一に對し攻勢を取りつゝ左右の陣地を占領せんと企つるのである。

此一隅のみに就て得失を言へば、(ア)に下項するの確實にして割良いに優したことはない、それでは※印にある味方の石が効力を殺がれることになる。

(ア)に下項すれば一の白は早く治つて了う、一が安全になれば※は孤立の姿になり易い、右邊に白の打込が※の夾撃を兼ねることになる。

其よりも白一を何時迄も虐めて、其遁出すを待つて、之を攻めるのと、地域を固めるのとを兼ねる良着を得るに便にせんと謀るのである。

故に白が次圖即ち第百十五圖の如くに打ち來らば、圖にある如くに應じて差支ない、之では白が面白くない、徒らに黑を固めるに過ぎぬ一の手で單に(い)か(ろ)に打つて捌く位のものであらう。

項目

二間高掛り
- (1) 上桂馬
- (2) 夾（横下）
- (3) 下桂馬
- (4) 尖
- (5) 手拔

二間高掛り　第百十六圖

二間の高掛は趣向の手で、其一隅に就て云へば小桂馬に掛るよりも損である、之に對し黑二と應するが現今流行の定石である、然るに之を手拔すれば黑の方が割合損となる、夫故黑二は他に急を要する所がめれば格別、然らざれば逸す可らざる好着手である。

之を白の側から見れば、夫れだから隅の多少の不利を忍んでも黑をして二に應ぜしめて、先着を保有したい時には必要の打場所である。

斯くて後日白が發展せんとせば、☒印は好い處である。☒印が白の爲めに好い處であるから、之を遮つて夫れに據るは黑の爲めにも亦好い處である。

白一に對する黑の應手は二の他に(は)と打つもある、夫れは後日☒印から白を襲はんとする計畫が確定してない時に用ゆべきである、又昔は(ろ)に打たせた事もあつたが、白一から三の三へ及ぼす威力が左までゞないのに此點を擇ぶのは考へものである、又時として(い)に夾むもある。

第百十七圖

之は二間高懸を趣向の手として使用する一例で、始め黑一と打出し、白は一、三、五に組む常型を避けて二を秋隅に下し

た、乃で黒三は白二が普通打つべき夏隅の三に據つたは至當の着手で、黒を持つては斯く一と三と聯鎖のある地歩を占めるが長策である、と云ふは打易いからである。

何故打易い乎？

白若し※印に來れば☒印に一間立ちの陣形を作る、夫れを作れば△印に白を三間夾をすると同時に、三と☒なる本陣から良い拆きになると云ふ好着點が生ずる、白は夫れを黒に打たせてはならぬと星下邊に拆くが順である、斯く白を余義なくさせて黒は他の好點を奪はんとする。

恁う云ふ工合に着手の順序や、占領地點が鮮明に知れてある、斯くて碁が問題を惹起す恐れなくして進渉する、殘るは黒先着の効力である。

だから黒三は物好みをしないで眞面目に勝を制せんとす

坦々たる道を行くが如く亦蹉跌なし

るには必須の、且つ絶好の着點である。

以上が布石の御話で、餘談に亘つて相濟まぬ次第であるが、敵が尤も至極の着手を撰び來るを、趣向で之を少し捻つて見やうとて二間高掛りを採用するのであるが、夫れを申す前に布石の意味を能く飲込んで居ないでは二間の高懸りが澁い藝を演する眞味を嘗め忌からうと思へばこそである。

扨て白の手番となつて、盤上最大の場所は勿論春隅の占領にあるが、さすれば黒は矢張☒に備へて『郎君は郎君、妾は妾』と云つた風に濟まし込む、すると白は一着後れて居る分を補ふよすがに窮することになる。

此際此時圖の如く四と二間高懸を採用して黒五の應手を促がし、先手を取つて春隅に陣取り、二、四、六、をして互に呼應

する所あらしめ、以て碁の戰局を廣くせんと企つるのである。

(1) 上斜走　第百十八圖

圖の如く敵の布石が低く陣取る時、小桂馬に懸るよりも一と高く打つ方が得な事が多い。

黑二は本圖では己むを得ないが時には夾むもある。

(2) 夾　第百十九圖

白三は四に打つもあるが、一と隔てられては勝手が悪い時は、仕方なしに黑に三の三なる四を讓るのである、黑六は(イ)に冲み、白(ロ)に約へてからにするもある。

之は古來の定跡でない、秀榮が自慢の創案の樣に聞いて居る。

白は斯樣に譯なく左邊を黑の手中に委ねたに就ては唯は濟さぬ、黑二の右側に文句を付けたい存念があるか、又は隅で活きて小成に安んじて此中腹一帶の地域に黑軍をして猖獗ならしむるに堪へぬ時かである。

第百二十圖

白三を三の三に打てば圖の如くなる、黑四は味方が二にあるから六と綽出す豫算があるからで、斯くて白一は孤軍の姿となる前圖を用ゆべき乎、本圖に從ふべき乎、夫れは碁次第である。

(3) 下斜走　第百二十一圖

黑二を下斜走に打てば本圖の形となるが普通である現今或意味から之を碁の初に打出す事もあるが白の五、一、三な